麻生路郎主幹

川柳雜誌

四月號

川柳雜誌第三卷第四號目次

感想・評論

助六を評す　黑木　莢豆
雜　感　竹馬居主人
三日路雜記　木村半文錢
大家を夢想して　井上　刀三

研究・其他

口語體の句　麻生　路郎
火鉢に凭りて　吉川　啞人
犬　蛭子　省二
新戎橋より　萬よし生
飢ゑた狂犬　安川久流美
日本吟行　西垣　松雨
私の知人の川柳觀　諸　家
女人高野同人吟行　朝陽記
募集句　硯（久良岐選）風邪（馬行選）下宿（柳路・朝陽選）各地柳壇會報　川柳家戸籍調べ　川柳

創作

近作　麻生　路郎
川柳塔　塚崎　松郎
同　高橋かほる
同　林田　馬行
同　庄　萬よし
同　太田　朝陽
同　黑木　莢豆
同　井上　刀三
同　編井花童子
同　吉川　啞人
同　岩崎　柳路
同　森田　頴翠
同　馬場　月兎
同　橋本二柳子
同　安川久流美
粒々集　諸　家
近作柳樽

書架　編輯後記

大正十三年三月三日第三種郵便物認可　大正十五年四月一日發行　大正十五年三月廿五日印刷（毎月一回一日發行）

川柳雜誌社同人

主幹　麻生路郎

岩崎柳路　亀井花童子　藤本卯之助
伊藤彦造吉川啞人　駒井美の作
井上刀三　高橋かほる　麻生葭乃
馬場月兎　高見柳骨　佐々木默閣
原風史　竹田蘆穂　酒井駒人
林田馬行　竹内多聞　喜多飯山
橋本二柳子　塚崎松郎　三好革洲
西垣松雨　黒木茨豆　宮内一洲
徳田双柳　矢田右大臣　庄萬よし
太田徹郎　大馬洲　森田輝翠
田辺朝陽　柳川松馬　關本雅幽
（いろは順）

道頓堀支部　大阪市南區新戎橋南詰　幹事　庄萬よし
天滿支部　大阪市北區南同心町二丁目一　幹事　原史風
岸和田支部　岸和田市下野町四一九　幹事　太田朝陽
鶴町支部　大阪市港區鶴町三丁目一一〇　幹事　關本雅幽
城南支部　大阪市東區餌差町二二一番地　幹事　駒井美の作
六甲支部　兵庫縣武庫郡六甲苦樂園　幹事　佐々木默閣
淀川支部　大阪市東淀川區南濱町一九四　幹事　四垣松雨

神戸支部　神戸市湊町一丁目電氣局西　幹事　庄萬よし
山口文部　山口縣山口町石原小路　幹事　柳川洲馬
豐中支部　大阪市外豐中榮通二丁目石賀方　幹事　林田馬行
東京支部　東京芝區愛宕町一ノ一六大成社内　幹事　岩崎柳路
函館支部　函館市青柳町五〇　幹事　龜井花童子
住吉支部　大阪市住吉區安立町五丁目一二二　幹事　德田双柳
仁川支部　朝鮮仁川仲町一丁目八　幹事　矢田右大臣

女人高野同人吟行

前列向つて右より、竹内多聞、林田馬行、路郎先生、塚崎松郎、太田卯陽、後列向つて右より、高橋かほる、徳田双柳、井上刀三、西垣松雨、庄萬よし、橋本二柳子、竹田鷹穂

（三月七日女人高野吟行の歸途長野西篠橋のほとりにて撮影）

近作

麻生路郎

逢ふだけでよかつたころの菜種咲き
てんてこ〳〵妻の襷がけを見てゐる雀

りりを保險に入れたと妻から聞かされて

はたちごりさうかと言つたばかりなり
長靴がへびにも見へて灯がともる
家へ歸れば社長は社長僕は僕
晩酌におさうさんに死が近づくか

病床にて一句

もうふにあたるいきのまろさよ
鐵瓶がしんねりむつちり横をむき
二階はさびしふと取りだして見る鏡
二階を降りてどこへ行く身ぞ

口語體の句

句作上の常套語法（一）

麻生路郎

川柳は他の短詩型と違ひ、主として俗語體であるがために、他の短詩型よりも下品なやうに世間から誤解されてゐるが、その格調が俗語體であるがために如何にも俗惡な詩のやうに考へることは全く意味のないことである。

今日雅語雅言であるとされてゐる萬葉でさへ當時の通語であつた。鎌倉時代の『さん候』だつて今の大阪語で言へば『さうだす』にあたるやうに當時の通語であるものが、今日では立派な雅言となつてゐるものも少くはないのである。今日の通語で詠まれた川柳でも幾多の春秋を經れば、一種のさびがついてその時には雅言雅語として通用しまいものでもない。

川柳が一時墮落したのは俗語體であるがためではなく、その當時の人心が墮落して無閒と懸賞などに走り、文藝を玩弄視し駄洒落や掛け調の句を多く生じたことが最も大きな原因をなしてゐるのである。

『なぐさみに女房の異見聞いてゐる』の如く川柳が主として俗語體であるといふことは、むしろ、川柳をして川柳獨自の節奏を生じ、自由で多岐で、全く特異な光りを放つ詩型を生んだ素因であるとさへ思はれる。

そして、夫れ等の俗語體の川柳の中にあつて更に一段と表現に妙味を持ち、内容を躍動せしめてゐるものに、口語體の句と半口語體の句とがある。以下少しく、それ等の句について述べて見やう。

（一）口語體の句

口語體の句とは十七音字が、すべて口語からなりたつてゐる句をさして云ふのである。

口語體は作者が描かんとする人物の一人、或は一人以上の言葉を繙りて光景を躍如たらしめるのであるが一歩あやまれば平々凡々たる句となることを免がれない。

—昔の句—

退きなさい今日や明日では焚きつかぬ

（評）これは勝氣な女房一人の聲であるが、これだけの短かい言葉で、亭主が竈の下にうづくまつて、火吹竹で、プウ〳〵やつてゐる態も、濛々と立ちのぼる煙さへも見ゐるではないか。そして其の裏面にからまる夫婦の問題さへも想像に難くないではないか。ようどんす袂の石を捨てなせへ

（評）今にも身を投げやうといふ危ぶないところを背後から抱き止める。女は無理にも振り放して身を投げやうとする。さても生きては居られぬ此のからだ故助けると思つて放して下さいと身をもがくのを、しつかと、だきとめ、どんな仔細か知らないが、と幡隨院きめこむまでの芝居がかつた光景をこの短かい口語によつてあり〳〵と描出してゐるところに口語體の句の生命があるのである。

晩あたりちつと來給へどれも下手

（評）親の死目に逢はぬと云はれてゐる碁や將棋、下手の横好きが目に見ゐるやうだ。

南無女房乳をのませに化けて來い

（評）人世これほど悲痛な聲はない。この句を讀むとすぐに「乳貰ひの袖に突つぱるかつぷし」などの句が思ひ出される。

おくたびれさてお内儀はひよんな事

（評）これだけの言葉で、亭主が長い旅から戻つたことが知れる。そして、その女房が亭主の留守中に仇し男をこしらへて逃げたことが知れる。そして御近所の人から斯うした言葉を聞かされた時の亭主の泣き出しさうな顔が、あり〳〵眼の前にうかんで來る。

（評）この句を讀むと直ちに、下女にふられた亭主の、いかにも當惑しきつた顔が見ゐる若しか、女房に、つげられたが最後、一ト波瀾持ちあがらねばすまぬところであらう。

これ小判たんと一ト晩ゐてくれろ

（評）人間の心の中に這入つて見れば、誰でも、こんなことを言つてるのであらうと思ふと、おかしくもある。

母親は勿體ないがたましよい

（評）今も昔も變らぬのは男性愛であり極道息子の心理狀態である。一直線に言ひ切つたところに、この句の妙味がある。

孤をかぶるぞよ位はきくもの

（評）これも前句と同じく放蕩息子の言葉である。あの女のためには、「今に孤をかぶるそよ」といふ父親の異見位は耳にも這入らないことを言つたものである。孤をかぶるとは乞食になること。

もちやれたが當り障りのある女

（評）御當人がだいぶのぼせてゐることは此の婉曲な非難の仕方でも知れるではないか。輕妙。

—今の句—

おこゝひの今頃呑んでゐたものを　眠聲

ほつこいてほつこくわけにいきまへん　紋太

眞實をあかせば君は逃けるだろ　輝翠

こほろぎよ私も蚊帳でおきてゐる　葭乃

新婚を祝して

一寸した事にも妻は笑ふでせう　路郎

君見たまへ菠薐草が伸びてゐる　同

にあげた口語體の句の中には心の中で思つてゐることをいかにも其の人が喋べつたかの如くに取扱つてゐるのもあるが便宜上このこころへ入れておくことにした。さうかと思へば對話の形をとつた口語體の句のあるのも面白いと思ふ。（つづく）

川柳塔

○　塚崎松郎

みな俺につゞけこばかりおごる氣の
髪結ふてみたがあきられもせず
あざけつたその戀を知る時が來た
落籍されてしきりに涙もろくなり
むつこして出るこチラシに突當り
十何時間もかゝつて喰ふだけの
第三者笑ふばかりが能でなし
誰れをはゞからず内の人内の人
任されてちこ恐ろしい氣にもなり
議論なかばに友達のここ
手土産を左右に靴の高鳴る日
知らぬ街に疲れおほるねうらかさ
なまじつか優しい言葉聞くまいぞ
日一日人の計算のみに生き
本降りに馴れて蛙の鳴きつゞけ
友に持ちたし雲雀もコスモスも
かぎが取れたこは俗物何を言ふ
貧しけれぎも朝風呂に馴れ
友達がだんだん減つて行くも戀

○　高橋かほる

隱居して財布のさらをこしらへる
鯛のあら知らずに犬の通り越し
手の平をかく事を知る美少年
何んこ無くコーヒ茶碗の處女に似る
踊から出て自動車の黒い色

○　林田馬行

珠数の手の下に子供が二人ゐる
なに故生くにみんなたじろぐ
鐵砲の荷なうを兒戯と云はるゝか
著書古く黒く不遇の今日に似る
犬鳴いて今日と明日へ線を引く
夫とは蟻に似てゐるものを云ひ
ねぎの香に暗さ忘れて走り元
功ならず歸る障子に影やある

○　庄万よし

うちの子になれと女の子を譽める
政商になろうかと思ふ髭が伸び
輕井澤阿蘇山派手に死ぬところ
いやといふ程下剃につめられる
忽ち三版までを刷つておき
切れる日に惚れて居たこと繰り返し
其間に貸手に弱身ありはあり

○　太田朝陽

一番の將棋にさかな賣れ殘り
初午に雷獨樂も音を添へて
子の藝の一つ一つを客はほめ
夜鳴きそばへットライトをまぶしがり

○　黒木莢豆

戀の果敢なきおごける間なし
妹がおこれば兄もおこるなり
無智の女のなすび齒淋し
麗かさ仙香の香になまけたり
ごの子も知らんやろ玩具がこわれ
笛吹き〳〵來たは子供の時の戀
蝶のうれしさはあのね〳〵なり
こけついたことこが亡父の夢らしく
借りておく二階をさしてかへりくる
たれか來て露路に小便してゆくは
手と手と比べて友友と飲み
にくらしい程愛嬌のひそむ唇
我未だ阿呆と戀をせざりしが
君たちの議論相手にして居れず
むし暑い夢がてんたう蟲になり

○　井上刀三

太陽はなやみをみんな捨てといふ
吹殼を數ふる事をおほねたり
あざけりを襟白粉にみなあつめ
そこ搖れて死ぬるこそこそ望ましき

透きとほる雪の肌さへ人のもの
男の悲しさ皿も運ばれず
妻を貰へば洋酒そろはん
人を見下げた金の音かな
ナイフに見とれるし怖さに家を出る

○　龜井花童子

悅びに行く女房の派手な柄
半分は呑みしろにして嘘を云ひ

○　吉川啞人

粕汁に硝子戸疊り切つてゐる
均一へ紋付醉ふた手をあげる
豆炭を内職の手で崩すなり
鑵詰も福神漬は世帶染み
入學を姉の袴で間に合はせ

○　酒井駒人

活動へ行つたと娘云はぬなり
妹の方にも氣ある養子にて
自分では手傳つてやつたつもりだが
圓滿な事には妻の朝寢なり
戸を閉める音さへ料理屋らしくさせ

○　岩崎柳路

慰謝料をとつても女氣がすまず
似た者が夫婦と他所をけなすなり
女の悲鳴樂屋の方へ消えてゆき
はかなさは妾僞名で出す手紙
上つ張りの儘珍客にうろたへる

○　森田輝翠

乘せられてゐるとは旦那知らず飲み
愚かさは野心があつて奢るなり
お情けへ唯感激が溢れたり
跳ねつけてみたが氣になる地位に居る
おい其處を退けと卷尺伸ばして來
抱負があつて人間死にこじれ

○　馬場月兎

貰はれる妓が大理石見つめてる
くぼんでく眼に肉感の怖ろしく
女ですもの出獄が待ち切れず

○　橋本二柳子

仕送りが絶えたので母案じて居
犬のおつさんとお土産を置いて行く
死んだ事病院の名を言ひ添へる
草苅がごむまり一つ見付け出し

三日路雑記（二）

＝古俳句と川柳の類想其他＝

木村半文錢

寺へ來て拳を握る寒さかな　蒼虬

握る手に爪をふかく探りあて　半文錢

蒼虬の句は、腰越満福寺で、義經の述懐でありますから、内容や作句の動機は全然私の句と相違いたしますが、これも感じに似通ふた點があります。『全身の脈をぎつしり一と握り』の拙句になると、大分に感じも遠退ひてゐる樣であります。それから終りに臨んで、川柳も俳想に類似點をもち、これを詠ふ上に於て、敢て俳境を侵すものでなしに、其處には明確に川柳の智性を獨占すべきものでありますが、左の句のやうなのは古俳句としても、智性の勝つたものであらうと思ひます。そして何處かに一脈の共通點が、表現の上に認められる事を高唱したいのであります。

むしつてはむしつては捨て春の草　來山

雨戸越す秋の姿や灯の狂ひ　同

初夜と四つ爭ふ秋となりにけり　同

椿寐たを首あげて見る寒さ哉　同

十六夜はわづかに闇の始めかな　芭蕉

白露に淋しき味を忘るゝな　同

白菊の眼に立てゝ見る塵もなし　同

やがて死ぬけしきは見へず蟬の聲　同

花守や白き頭をつき合せ　同

田一枚植ゑて立去る柳かな　同

夕涼みよくぞ男に生けれる　其角

憎まれてながらふる人冬の蠅　同

稲妻や昨日は東今日は西　同

黄菊白菊この外の名はなくもがな　嵐雪

竹の子や　兒の齒莖の　美しき　同
梅一りん一りん程の暖かさ　同
蓮の葉に小便すれば　お舍利かな　同
帷巾の　願ひは安し　錢五百　支考
動くとも見えで　畑うつ　男かな　同
何事ぞ　花見る　人の　長刀　去來
飛込んだまゝか　都のほとゝぎす　同
我事と　泥鰌の逃げし　根芹哉　丈草
有明に　振向き難き　寒さ哉　同
着て立つて　夜の衾もなかりけり　同
本箱になるべき　桐の若芽哉　許六
今日限りの　春の行衛や　帆かけ船　同
看經の　間を朝顏の　盛りかな　同
行秋を　道々こぼす　紅葉哉　乙由
閑古鳥　我も淋しいか　飛で行く　同
惜めども　寐たり　起きたり　春であろ　鬼貫
咲くからに　見るからに　花の散るから　同
夕立の　又や何處に　下駄はかむ　同
行水の　捨所なし　虫の聲　同

◇

月を子に　見せてやるだに　秋深き　半文錢
妻ひとり　師走の庭の　たゝづまひ　同
靈柩車　あとを路行く　人の秋　同

とく出でゝ落日見よ　やむぐらもち　同
天地の今や　身に添ふ　夜具の中　同
春ながら　路行く人の　肩に雪　同
ざくと　踏む霜や　前人未到の地　同
あかつきの　夢は結んで　霜柱　同
二三寸春を　掘り下げ　種を蒔き　同
朝風呂の　青きが中を　拭ひ出づ　同
陽の前の　都に氷　打ち碎き　同
傾きし　月の山々　北まくら　同
食膳に　のぼりぬ時を　分つ鮎　同
水空を　底に宿しつ　金魚の死　同
枕許の　一册秋を　閉ぢて在り　同
葡萄熟しつゝ　人の手を　慎れ　同
苺の　早熟露の　認識　同

以上は拙句の心づくまゝを例に擧げたのでありますが、この他、斯うした意味の含んだ俳境と一點共通した句は、各川柳家の作品を調べたら多々あらうと思ふのであります。古俳句の圈點のある處は、特に川柳家の注意を促すために附したもので、其の理智的表現と言葉の何處に自由に選擇せられてゐるかを味解したいと思ひます。尤も此の古俳句は私の貧弱な愛書から拔萃したもので、これを文獻的に調査すれば、驚くべき多數の類似的傾向句を發見するであらうと思ひます。その點で僅かに一端に觸れた私の貧しさを憫笑せねばなりません。が、多くは斯うした類型である事をも朧に窺知する事が出來得やうかと思ひ

ます、殊に一茶や大江丸や鬼貫などを専門に調査すると必ず有意義な發見をするだらうと思ひますし、その上に古俳人の言葉の多い表現の自由さを認識せしめるだらうと思ひます。

要するに元祿時代から寛政天明こいふ樣に古俳句も非常に發達してゐますが、それと同じ樣に川柳も發達してゐるのですけれども、川柳は俳句に比べて自由でありながらも、いつも俳句の下積になつて居りますのは何うした事でせうか。これは確に研究事項だと思ひます。

併し、古川柳も古俳句のもつ言葉と同じやうに隨分と言葉の使ひ方は洗鍊が足りてゐるやうであります、俳句の雅言に比して川柳の俗語の妙味など嚴密に檢討すると興味のある研究材料です。特に川柳用語としての、さうした俗語を調べてみるのも非常に有益な事だらうと思ひます。私も作家でなければ然うした研究すべき必要のあるものを選んで、少し科學的に調査してみたいと思ひますが、何分淺學と貧乏と作句に追はれるのとでいつも文獻的には努力の出來ないのを遺憾としてゐます。大阪でも隨分と愛書家が住んで居られるらしいですが、一コレクショナーとしての誇りより少し研究的に一歩進められたらば自他共に益するだらうと思ひます。川柳家の川柳書を愛藏する事は單なる愛藏癖に止まらず、その專門家としての權威のために、それら貴重な古書を愛藏する所以であります。川柳專門が古書を死藏する事は全く無意味の愛書癖です。素人のやる事だと思ひます。

話が餘技に亘りましたが、私の貧弱な俳書からでも、今日の川柳と對比すると、これだけの類想や類句や同じ表現の手法を見る事が出來ます。これを綴密に調べたらより以上の接衝點を發見するだらうと思ひます。尤も斯うした古俳句と共通したる川柳が、今日の川柳の全體に亘る點色でない事は勿論でありますし、殊に斯うした部分は小極のものだと思ふのであります。今それらを評論する餘裕がありませぬが、これらの精選された川柳にも隨分と古俳句と似通ふたものがあるのでありますから今日の進んだ俳句と對比すれば或はそれ以上の共通點を見出すかも知れないと思ひます。それらも漸時手をつけて其の一端だけでも洞察してみたいと思ひますが、それは他日に讓りまして私の言はうとする事は、今日の川柳卽ち新興川柳以外の既成脈にあつては、その作品が餘程の注意を拂はぬ以上は古川柳と殆ど暗合するこいふ事であります。川柳の用語が通俗で單調に流れた現在の傾向から推すと、古川柳のもつ表現法は完全してゐますから、如何にも優れた川柳だと自負してゐても柳樽の何處かの頁の中に、同じやうな句と用語と表現法と句はし方とが轉がつてゐるのですから全く古人の域を脫するこいふ事は至難とせなければならぬと思ひます。私は既成川柳を讀む度に如何に其の同想同傾向に陷つてゐるかを發見して危惧に堪へないものであります。要するに今日の多くの川柳家は古川柳の多くを調べずして作つてゐるらしいのですから已むを得ぬ結果でありませうが、餘りに先人を惧れぬ大膽さだと思ふものであります。

と同時に明治復興期より現在までの所謂既成派を調べてみればいかに同類同傾向に墮してゐるかに驚くものであります。

古川柳の用語と今日の川柳用語とを調べて對比し研究すれば此の類想や同傾向を指摘するに充分の材料とならうと思ひます大阪の川柳家は由來作家としての本分に滿足する人が多いらしいですが、少し此うした研究事項に指を染めてみては何うでせう。愚劣なゴシップに滿足してゐては何時の世になつても愚劣な川柳家としてよりの存在しがありません特に今日の大阪の川柳家は失禮ながら苦勞の足らない――こいふよりは苦行の積まない斷け出し連中が、さも大阪の川柳界を吾手に握つてゐるらしいゴシップ振りをやつてゐますが小々お氣の毒です。殊に唯一の作品と來ては、全くお話しにならんじやありませんか。最近悠々とそれらの作品を見渡して『ああ―古川柳の生命も亡ぼされたり』と切に嘆いて居ります。無學無識無智は恕すべきとしても、川柳の唯一の作句武器である處の用語の研究、用ひ方、なぜ殆ど滅茶々々に俗惡と幼稚とでフンダンにされてゐますが、あゐした不熟の作家に對しては、少し其の畑の先輩が、眼を開けてやらねばならぬのではないかと考へてゐます。私は其の點で此頃の既成作品を見ると古川柳の爲めに一脈の憤慨を感ずるものであります。それ程に最近の大阪の川柳は、幼稚であり、俗惡であり、無内容であると思ひます。

それらの不熟の作家が時を得貌に川柳を私して居ります結果今日以後の生れ來る川柳家の爲めにも多少危期があらうと思ひます。古川柳の素讀もしない作家が、今日の川柳を模倣したとなれば、蓋し其の結果の恨るべきやは、只今の不熟作家の比ではあるまいと思ひます。或は此の不熟作家たちも實は古川柳の素讀も出來てゐない人々であるかも知れませんが、いづれにしても古川柳の妙味は、斯うした川柳を慕ひながらも其の人達に依つて失はれて行くのであります。全く危險だと思はれて仕方がありません。

それで大阪の川柳家にも、それらの不熟作家を消化陶冶するために、少し古川柳の繙照研究を試みては何うです。今日の大阪の中堅作家は多く此の不熟作家の中にはいる人々で、大家と仰がれてゐる人々の中にも、嚴密に言へば不熟である事を指摘したい人も混つて居りますが、それらの人々を一丸として眞に古川柳の妙味を研究し、今日の川柳に生かす事を計畫すれば、それらの結果に依つて今日以後の川柳家の素質が如何に改善されるか、如何に有益視しられるかを鮮明にするだらうと思ひます。今日の川柳家の如く、餘りに作句本位の超然主義は、その人としての全技的氣分で如何とも仕難い問題であらうと思ふが今後選者として立つ以上は、すくなくとも自家の川柳上の信念を強めて置かねば、又しても無力の選者を儘發せなければならぬ結果とならうと思ひます。同人制度の雜誌經營の罪にも依りますが、この有つて益ない選者級を作る事は、川柳を益々俗惡化し、低級化し、幼稚化せしむるものであらうと思ふのであります。今日の大阪の柳界の代表者諸氏が少し斯ういふ問題を

経營外にもお考へになる事が、直接間接に川柳を社會的に向上せしめる所以であらうと思ひます。愚劣なるゴシップに終始せしめず、よく指導の任を執り、他日の大成を期する事が川柳界の益々隆祥なる促因であらうと思ひます。今日の如く、先輩も大家も中堅作家も皆等しくゴシップ式に滿足せられてゐたら、川柳そのものゝ完成は勿論川柳家としての立場も滿足な結果を擧げられないだらうと思ひます。

大阪に立派な川柳の雜誌が幾つも發刊されてゐる事は實に心強い現象でありますが、その誌面の多くは、句會の集積とゴシップ種と愚文とで埋めてゐるのは甚だもの足らぬ點でありますが、今少し研究的文字が誌面の半分を埋めるやうに努力せられるのを私は切望したいのであります。川柳作家として句會の雰圍氣に觸れゝば滿足である事を本能とする人は是非ない事でありますが、得てして然ういふ人達にゴシップが多いといふのも多少變な話しでありますが。夫れは良いとして誌面に努力の跡が見ゐるやうになりたいと思ひます。今日のやうに三十頁が五十頁になつても、誌面はいつも空虛で散漫であつては、所謂量的發展に止まり質の集積が伴はぬ事になりません。肩の凝らぬ程度も愉快でありませうが、少し肩の凝る程度の努力と質的に積まねば結果としては愚劣な雜誌であり團體である事を思はせる許りです。此の際川柳雜誌なども餘り娯樂傾向に偏傾せずに少し奮發して欲しいと思ふものであります。若し研究的努力を積む同志があれば、小生も悅んで一員に加はりません。一人の力としての及ばない事は、多數の力でこれを完成する事に努力すれば良いのです。その點で發奮する人を期待する次第であります。

一方、句會の集積句と毎號の集まる作品に對しては、その社の代表者か先輩が指導の鞭を垂れて、よい方面へ導くために簡單なる批評も結構だらうと思ふし特に二三ケ月を期して、それらを部分的に研究批評する事も、一つは句作奬勵であり、二つには川柳の一般傾向を善導して行く上に効果もありますから、これらは各社で競つて批評、鑑賞、研究、又は名作推薦といふ順序を作ると非常に作句熱に對しても一脈の生氣を注ぐ事にならうと思ひます。要するに大阪の川柳界は在來の態度は姑息的で消極的で非研究的であつた事は否めないと思ひます。より良き後輩を生む事は、さうした機關の完備に在ります、そしてそれらの能き作家を生む事は、必然的に其の社の盛大になる根本であり、延いては社會的にも反響する處が事實となつて多くの同志を得やうと思ひます。その點多士齋々たる『川柳雜誌社』なご率先して、この研究機關の完備を一日も早く整ゐられる事を切望する次第であります。川柳の本質が藝術的であるか通俗的であるかは、斯うした研究團體に依つて如實に發表して行けば良いのであります。斯うした事を書きたいため、私の貧しい古俳句觀を發表したのではありませんが、つい書く儘に昨今の大阪柳界の有名無實の二三を悲しむ結果、少し長談議に終つた次第であります。次には、川柳の内容と無内容に就て具體的に書きたいと思つて居ります。寸暇があれば必ず實現いたします。

本社二月例會

二月十四日午後一時
於日本橋倶樂部

二月十四日午後一時より日本橋倶樂部に於て本社二月例會を催す。當日は雨天にも不拘左記の熱心な參會者で畫の作句氣分に浸り、最後に久し振りの相撲吟に一同例の熱論を吐き夕刻散會す　尚當日、笛呂、其象、山月、助六の諸君より兼題の送句があつた

路郎、革郎、刀三、莢豆、松雨、かほる、万よし、秀哉、ひろし、乾坤、飯山、花月、突支坊一醉、花麿、彩秋、三平、文久、三次、春莊、しげる、史朗、山雨樓、溪花坊、馬行、松郎、新庄と私

（二柳子記）

外　套（兼題）　松郎選

土砂降りに外套丈けの町となり　其象
外套の頭巾を取れば兄の顔　助六
外套を着てゐぬ背の輕く見に　笛呂
外套を着て肩がこる肩がこる　山月
醉はされた顔外套に埋めてる　飯山
新歸朝外套のまゝ聞される　万よし
外套の人女關に立つてゐる　二柳子
二次會へ行く外套は落ちかゝり　秀哉
外套の裾から娘らしい足　山雨樓
外套に貰つた茶菓子潰れてる　溪花坊
外套を脱ぎつゝ頭一つ下げ　春莊
工事場の杭に外套裏をみせ　史朗
外套は重し父の一生　路郎
足早に來る外套のぬれて居り　三平
外套へ首だけ見せる寢ずの番　同
外套の物足りなさは襟を立て　しげる
外套へ包みきれない氣持で出　同
外套の走るこ赤い裏が見え　かほる
外套を着て竹馬をこしらへる　同
外套の力吹雪へ有りつたけ　乾坤
外套の襟から醉が醒めて來る　同
外套の下が氣になる出來心　刀三
外套のポケツに雜誌汚れてる　同
外套の鼻先寒う母こ逢ひ　馬行
襟深い外套にまだ女來ず　同
（軸）外套を着るに二三度飛上り　松郎

櫻　溪花坊選

手をつなぐ擴さに櫻咲きみだれ　文久

もう醉ふた一人櫻へ髪をあて　秀哉
古本もこのごろ買はず櫻咲く　路郎
注文の帶は櫻に間に合はせ　松郎
麥畑へ車をよける花戻り　飯山
未だ咲かぬ櫻を電車書きたてる　花麿
葉櫻へ紬の對の人が來る　かほる
醉ふて居る帽子へ櫻さゝれたり　三次
ちこ早い櫻へよせた記事を見る　史朗
未亡人櫻の春を家に居る　刀三
お遠者で牡丹櫻を好く隱居　莢豆
櫻からちこ離れてる家に住み　二柳子
散る櫻春の風こは思はれず　しげる
盆栽のひがみを隱す櫻なり　同
櫻散る頃を養子の暇があり　乾坤
滿開の櫻に世帶忘れたり　同
男衆に櫻の散つた後の庭　馬行
櫻散る下でねんねこ着て遊び　同
（人）倫敦へ送りたいほど櫻咲き　革郎
（人）片方は櫻へつなぐしんし張　路郎
（地）宮詣美事な櫻見て歸り　松郎
（天）樂燒に櫻の下のまゐるなり　文久
（軸）櫻から見れば人みな慌てもの　溪花坊

主　人　馬行選

自白した丈では主人承知せず　三平
御主人の判を番頭使ひ分け　花麿

主人が折れて出たのでけりがつき　革郎
里へ出す手紙主人をほめて書き　ひろし
御主人の側へ氣象な女客　乾坤
札束を讀むに主人はひまを入れ　松雨
ボーナスに主人の理屈腑に落ちず　萬よし
戸を締めたあとを主人が振向せ　文久
主人らしさを頷いてみせ　しげる
末つ子が娘であるじ精を出し　莢豆
新聞を見てるのでない主人の眼　山雨樓
店先の主人に覺れぬ夜が更け　同
結界の女主人に乳が張り　秀哉
本名を醉ふた主人にふと呼ばれ　同
酒を呑む金は主人の知らぬ事　刀三
困らす氣主人用事を言ひつけず　同
戸を叩く音を知らないよい主人　同
せんじつめるとは主人の落度　松郎
店火鉢主人が來るとつまむもの　同
御主人に向ふの聲が變るなり　同
區役所へ主人利久をはいて行き　かほる
床屋から主人せばしふ歸るなり　同
ついたちの主人の顔を長う見る　同
ひやかしと知りつゝ主人愛想し　同
主人の留守と見ゐる店先　路郎
主人の顔の小さく見ゐる日もあって　同

主人の咳の外は聞ゐず　同
御主人の顔をよごして添ひごける　馬行
(軸)友達のことから主人云ふもり　馬行
いゝ主人まだその上にいゝ娘　同

刺身互選

忙しさは刺身の醤油忘れてる　花麿
鯖の刺身遠慮の要らぬ箸がのび　しげる
刺身前に時計ばつかり眺めてる　革郎
掌で受ける刺身のやりどころ　文久
生臭い刺庖丁の罪　莢豆
割箸ではさめば刺身裏がへり　溪花坊
切れ話まぐろの刺身殘される　かほる
酢味噌つけ〳〵せらぎの音をきゝ　同
その中で刺身は出前らしい皿　飯山
ちと醉ふてからは刺身を粗末に　同
猫板へ刺身になって並べられ　三平
去の狀を前に刺身で飲んでゐる　同
床柱刺身へ少し箸をつけ　万よし
花嫁は講義錄はご造りかね　同
よく飲める膳は刺身が減らず　乾坤
刺身皿足らないまゝの幹事なり　同
自暴酒に刺身のわさび少し利き　秀哉
刺身さで子供は無理な手を伸し　同
片身つくらして久々振りの風呂　松郎

父親の刺身は別にこつこかれ　同
刺身皿へもう妾宅の灯がこもり　馬行
心配の顔へ思ひぬ刺身來る　同
刺身皿さても無禮な箸の先　同
父一人かへらぬ膳の刺身也　路郎
いつゞけのもう刺身でもなかりけり　同
刺身にも塩末の色を見せてゐる　同

雜

齒がはゐる頃を調べる若い母　突支坊
憂鬱の屋根ばかり見る窓を開け　かほる
通帳米屋は筆に糠をつけ　松雨
話される事なら詰す恐い夢　しげる
知らず來たカメラ要塞地帶にて　溪花坊
こねてゐる官へ花のうらゝぎ　彩秋
よく茶碗割る總領を自慢にし　万よし
割箸はうどんの湯氣の中に割れ　松郎
小説のモデルに思ひあたる事　乾坤
小説のつゞきは母にふせられる　史朗
美少年惱める如きハーモニカ　秀哉
大それた罪を犯した美少年　花月
晩飯をそこ〳〵にする譯があり　一醉
擂合ひ小供の時の癖がでる　刀三
腹が立てば大聲で泣け子供　莢豆
友達をみんなだまして南に居　路郎

助六を評す

黑木莢豆

助六と私とは句會の席上で數度顔を合はせた程度の交際で親しく彼れの日常に接してゐないことはこの文を書く上に甚だ遺憾至極なことです。これは單なる句の紹介としてみていただいても結構です。元來私は一人の句を一緒に並べてみるだけでも批評の目的は大半達せられるものと思つてゐるものです。こゝでは彼れのすぐれた句を拔くことよりも特色のある句によつて彼れの輪廓を出さうとしたことを一言お斷りします。

句を透してみた助六は『人のいゝおつさん』の一言で盡きてゐると思ふ。彼れの句は地味で平易で直接的である。そこに香氣がない、華やかな色彩がない、夢がない、それだけに彼れの句には正直さがあり、環境そのものゝ中から飛び出したまざり氣のない生一本さがある、生活川柳といふ言葉があるなら將に彼の句がそれである。

彼れの句には武骨な大きな手のもつ、力强い愛がある。そしてその一句一句に彼れの生活體驗が色濃くきざまれてゐる、これが彼れの句の强味であり、他の若い作家と毛色が違つてゐる點である。左に句を追ふて寸評を試みつゝ、彼れのいゝおつさん振りをなつかしむことにしやう。

本店の丁稚えらそうな顔で來る
出雲屋を丁稚不精になつて出る
國の母丁稚は客と間違へる

なんといふ犀利な表現であらう。なんといふうまみのある句であらう。丁稚の句は可成り澤山よんでゐるが、この句をみても、彼れは實にこのやうにかわい丁稚をみつけて、思ふ存分にほゝゑみを投げかけてゐる。

赤蛙喰べてゐる一人息子なり
安產の母に襁褓が初手の用
子の寢顔哀れにみてゐる世帶痩せ
陰氣な日鷄少し早く寢る
鷄が暮れる籠から戻つて來

彼れの句にはこのやうに靜かに愛のにじみだした句が多い。しかもそれはセンチメンタルでなく、一人きめの悟りや一時的の興奮でなく、深い生活體驗から來た悟りがあり、披評があり根强い戰ひがあり、しかして極く自然なあきらめがある。靜かに心眼をひらいて大自然に直面して立つてゐる姿がある。

我家の樣にめしやへ戻つて來

植木屋も旦那と共に年をとり
安い鯖長屋揃ふてにほはせる
白い水撒いて豆腐屋吸ひつける

こゝにも彼れの靜かな人生觀が出てゐる。分を知り、あきらめの世界に入つた人の靜かな批判がひらめいてゐる。それぐ〳〵のカラーを鮮かに彫つけてゐる。

土砂降りのゴム靴中の水の音
角帶がゆるんで道が近くなり
俎板の傷なほ淺くたのもしく
重ね着の襦袢の調子ちと變り
玄關で靴はも一度尻をつけ

あきらめの境地にある人でなければみつからぬ靜かな鋭い眼をもつてよくみてゐる。ここにこのリズムカルな快い調子はだうだ。輕い剃刀のやうな切れ味はだうだ。作者の詩才をあざやかに見せられる句である。

正直な男雲突く程にのび
人里を放れ六部は錢をよみ

かうしたテクニックも棄しがたいものであることに前者に於てはうその苦るしさから解放されたときの正直そのものゝ嬉しさを、眼にもの見せるやうな鮮かさで歌つてニヤリとしたことであらう。作者の才を心にくゝも認めないでは居れぬ。なほ私の好きな句に『伯母ちやんと用ありさうにへばりつき』があるなんと平和な心境ではないか。

以上私は簡單に感想をのべて來たが今少し私の疑ひと希望を述べて筆をおくことにしやう。

太陽のまゝに人間逆はず

これが最近の彼れの人生觀である。彼れの句の全部一貫して是れの主觀が色濃く流れてゐる。餘りにも強く流れてゐる私にはこの句にどこか大まかな物足りなさを感じるがそのものたりなさが直ちに彼れの句全部に對する一貫したものたりなさである。私はこの煩惱みにぶつゝかつてゆく方針をとつてゐる。なやみをよけることは或る程度の世間苦を味はつて來た人々には大抵見當がつくことだと思ふ。彼れの生活は彼れの心境は如何にも老人的である。あまりに靜かである、あまりに狹い範圍に限られてゐるやうであるこのやうに天分ある作家としての彼れに望むものはもつと廣い世間をみて欲しいこと、もつと深い世間の惱みを彼れの胸の中へ生かしてもらひたいことである。あまり個人的に終つて欲しくないことである。丁稚に對する彼れの愛の眼を乞食の上にものばし、欲しいことである。これらを言ひかへて一言に盡すなら、他人の惱みを彼れ自身のなやみとして味はつて欲しいことである。もつと讀んで欲しいことである。もつと深く惱んで欲しいことである。このことは彼ればかりでなく他の多くの作家にも言ひたい。また私自身にもそれを言ふ。

これを彼れに望むことを私はちつとも不自然だと思つてゐない。彼れの天分を強く信ずるものである。彼れのやうな作家がさうざらに恵まれてゐるとは思はない。最後に彼れのために私が望んだなやみの境地の句を一句あげてこの文の蕪雜を補はして頂く。

豚の子につゞく豚の子ばかりなり　路郎

（完）

雑感

（下）

「川柳の作り方」を讀みつゝ

竹馬居主人

著者が洒落體の項に於て論ぜられた如く、文句取、地口、掛調等々、一歩踏み違ゐたなら全く座興の遊戯文學となつて、文藝の圏外に走る。

いざさらば居屋のあるところ迄　（芭蕉の句）
いかに鬼神たしかに聞け福は内　（謡曲）
珠數さゝくとおしもんで小言也　（勸進帳）

は藝術の神聖を冒瀆するものでありましよう。文句取の墮落は狂句同樣剪除せねば、古川柳詩を誤らせます。此點に於て現代人は自己の言葉に非常なる感興と意義を覺ゆるが故に、文句取り吟は餘り多くは見受けなくなつた。從つて病弊も少ない。即ち時代思潮の然らしむる所、主觀句の生れるのも亦當然と言はねばならぬ。

著者は『なり』留の句に就て懇切なる解説をして居らるゝは嬉しい。初代川柳時代には『なり』留は可なり多い。説明と關定に失敗し易いが、若し餘情と輕味が加ゐられてゐたならば、古雅な感じがする。

『留』に關し自分が平素思つて居るは　古句の一特徴とも言へる『事留』で、

蒲穴を座頭の見出す寒い事
出まして留守とは御念のいつた事
懸り人寢言に言ふがほんの事
二十四相に下駄をうるさんだ事

等は今日餘り多く學ばれてゐないが、復活さすべきや否やと言ふに、斯る調は古川柳時代の産物で背景あつての事、大正の御時勢に眞似ねばならぬものと思はぬ。實際あつた事で其句會に自分と隣合せに坐つた若い川柳家が　苦吟の末此句の下五をごうつけるかと手帳を差つけられたので、返答に窮し六字でも七字でもかまわぬでしやうと三十六計で逃げて置いた所が、夫れでは革新派のやうになつてしまふからと獨り言を云つて居られた。後で筆者の披講の際氣付くと『きつい事』と附けてあつた全く自分はきつい事に感じた。夫れ程輕便實用な留め方である丈けに吾等の情想にぴつたり合はぬものがある。古句の言葉をのみ眞似る事は大に愼まねばならない。（同書再讀の際氣付いたが事留に就ては著者も自分と御同感で丁寧な説明があるから拔記して置く――むごい事凄い事といふ風に同じく上五の説明的な文字を用ひるものもあります。これらの作品は餘程説明語と内容との間に調和がとれてゐないと却つてほんとの説明に

終つて了つて一句としての感興連想などを失ふてしまうものであります。故に除りに内容と説明的な文字とが約束的に喰ついてしまつては到底詩としての成果がありません）。

一般柳壇のハヤリとしては未だに『ふと』『やうに』が目立つてならぬ。『ふと』は七八年前歌壇に好むで用ひられた言葉の傳染で、和歌は文字が多いから斤程苦にもならぬが、川柳ではイヤ味でワザトらしくてならぬ。此事は曾て『みちのく』誌に卑見を陳べた、『やうに』の形容體に對して、『餘程ズバぬけた比喩でなければ句になりません。が得てして平凡な見方より出でないものであります』とあるは至言である、

くすぐれば禿丸めたように なり
初鰹樂のやうにもりさばき

『ように』の句法は古句に非常に多く且名吟に富むで居るから之等を見て今人は少しは愼むだがよかろうと思ふ 『ように』の句の流行と漫畫の流行を對比すると面白い。くだらない似て非なる漫畫が多い如く。『ように』の句に此くだらぬ漫畫式の作が多きを占めて居る事である。

（餘事）川柳の作り方中『川柳には眞に俳句と同じやうな寫生はないとみてよろしい。たまにある事はあつても多くは諷刺皮肉を加味したもので、純なる寫生は少いのであります。彼の芭蕉翁の名句たる、古池や蛙飛込む水の音に對して、川柳家は古池や蛙飛込み浮いてゐるの純寫生をもつてゐますが、實は此句も翁の句に對する皮肉から生れたもので決して作句の動機は純寫生を意味してゐません』此處を讀むで居る所へ、俳人の訪問を受け自分は古池吟から素人の俳談をやつた。

去來心得て病床の機嫌計らひて申して云、古來より鴻名の宗匠をほく大期に辭世あり、さばかりの名匠の辭世はなかりしやと、世にいふものあるべし、あはれ一句を殘し給はゞ諸門人の望み足りぬべし、師曰く昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世、吾生涯いひ捨てし句々一句として辭世ならざるはなし、もし我辭世いかにと云ふ人あらば此年ごろいひ捨ておきし句いづれなりとも辭世なりと申給はれかし、諸法從來常示寂滅相これは是釋尊の辭世にして一代の佛教此二句より外はなし、古池や蛙飛込む水の音、此句に我一風を興せしよりはじめて辭世なり、其後百千の句を吐くに此意ならざるはなし、こゝを以て句々辭世ならざるはなしと申す也

井泉水氏の俳話中に

此句は芭蕉が初め『蛙とび込む水の音』と作つて、あとから『古池や』と言ひ足したと云ふ傳說もあるが、夫れはまだ傳說として輕蔑すべきではない。『蛙飛込む水の音』が焦點で『古池や』はその焦點をもつ圓としての感を引き纏めたものだから二行詩に切れるとすれば、『古池や』で切り『蛙飛込む水の音』となる、之れは決して形式文法的に云ふのではない製

作の心理から見ても味ふ上の心持から見てもそうである。泡鳴氏が書きかへたやうに、

古池や　蛙
とび込む水の音

とすると（卽ち蛙で休止するものとすると）蛙が靜止してしまつて、次の『飛込む』に續く所に不自然の屈所が生ずる。又斯樣な二動機均齊が俳句的表現の要素であるならば、

古池に　蛙
とび込む水の音

でも同じ効果を持ちそうなものだが、是では全く句にならぬ

小彌太氏が個人雜誌で

古池に蛙が飛込むで、どんな音がして靜寂な天地が動いた

芭蕉はそこで『古池や蛙飛込む水の音』とやつた、如實に描いたつもりだらうが、私には『水の音』が說明に墮してゐるやうに感じられて邪魔である、私の今の心持では『水の音』は必要でない、たゞ『古池や蛙とびこむ』で充分だ。もう他人の俳句では滿足が出來ない。

此の三つの話を材料に一時間餘コーヒーを啜つたのであるが、川柳詩に關與する吾等もお互に心得て置いて好い事で、第一話は句作に對する態度覺悟の敎訓、第二話は立派な焦點を有する動かすべからざる句を作らねばならぬ。第三話は柳樽を繙いて常に名吟に接し陶醉する。然し筆に口に橫說竪說するも、所詮は古人の作で一つとして自分のものではない古句は指月の指、門を敲くの瓦、自己の慾望を滿たす爲めには自己の詩を作るに在る。表現慾の衝動がなくてはならぬ恰も古人が古川柳に盛つた『約束』のように、而して川柳でなくてはならぬ場面は餘りに多いのである。

此際自分が古句に對する態度を告白して置き度い、病弱である自分は更に世間的欲望を喪ひ、專ら難句の解說に興味を覺ゆ日夜是れ事として居る。及ばざる遠きを知りつゝ尙ほ倦まないのである。然らば自らの句風が古川柳により近く、より似む事を切望するかと言ふに、必ずしもそうでない。從つて選者の塲合に立つても、古句にこうあるからと今人の作に筆を入れるような事はしない。佐々木博士が契沖を評された萬葉に、『契沖はあれほどの萬葉學者であるのに、萬葉の歌風を體得しなかつたと云ふ非難をする人もありますけれ共、元來此の歌風と云ふものは歌の學問とは別でありますので、殊に此の歌風は個人のその人々の好みといみものや基調としてゐるのでありますから、萬葉學者必ずしも萬葉の歌を詠むといふのではないのであります。寧ろ契沖から云へば萬葉の歌をとりまして、それを自分の好む歌風に融合せしめたと云ふ所に、契沖の優れたところがあると云へるのであります』と丁度斯樣な目標の下に甚だ潛越ながら欲する句が作り度いので、敢て古句風に係らないのである。（をはり）

火鉢に凭りて

吉川啞人

火鉢に凭りかゝつて柳樽初篇を讀んでゐるとたまらないいゝ句にぶつつかる。想に於て調子に於し學ぶ點が多い。一つ書いて見やう。

抱いた子にたゝかせて見る認れた人

岡惚をした男に言寄るだけの度胸もなしと云ふて戀病で床につく程の内氣でもなく、それとなく抱いた子を利用してよのめかす、こんな娘こそ『口説かれて娘は猫に物を言ひ』

國の母生れた文を抱き歩き

他郷に嫁した娘の出産の知らせに、よろこびを一人で持切れぬ母親が近所親類へ手紙を見せ歩く情の句。

剃つた夜はゆうべの枕きたながり

同感同感と云ひたいやうな句。

婚禮を笑つて延す使者を立て

笑つて延すは破談にあらず、月の客のためである。巧く表現したものである、『それでもこど女は鳥居の外をゆき』

二階から落ちた最期の賑かさ

人間の不慮の死を冷やかに見てゐる。

衣類までまめで居るかと母の文

暑いにつけ寒いにつけ他家に嫁つた娘のことが氣にかゝり貧乏をしてはゐぬかと苦勞するのも母の情。

約束をちがへぬ紺屋袋なり

下五がこの句の生命であり紺屋の明後日を裏切つたもの。

腰帶をゞるこ腰は生きて來る

說明の句と見てはならぬ人物がはつきり浮いて來る。

迷惑な貌は祭で牛許り

お祭さわぎに町内のものみな浮かれてゐるのに行列の牛ばかりは醒ましてゐる。それは勞働であるからだ。

朝飯を母の後ろへ喰ひに出る

『朝歸りお前もまあが始めなり』流石に母親は叱りもせず、でかした事はしかたがないここの上は父に知られぬやうに子をかばうこんな息子もいゝ加減改心せぬと『朝歸り頼みに思ふ母は寢』に面喰ふに違ひない。

小間物屋箱と一所に年を取り

箱と一所が面白い。

甚敵は憎さもにくしなつかし

今日あたりは遊びに來そうなものだこの間あんなに口汚なく云ふのではなかつた

指の無い尼を笑へば笑ふのみ

白熱たりし過去の戀も今は只追想するだに苦痛と見えたい。

私の知人の川柳觀

(一)川柳界では今、傳統派と革新派が對立して混沌たる狀態にあります。此の際川柳家以外の川柳觀を聞くのもいろ〳〵な意味に於て興味の深いことであらうと思ひます。その方法としては川柳に相當理解のある知名の方方に社から直接お願ひして御高見を聞かせていただくのもよからうとは存じますが、それは又の機會に讓りまして、此の度は社會のあらゆる方面から川柳觀を覓めて見たいと思ひますのであなたのお存じの方から川柳に對する御意見をお聞き下さいまして お知らせを願ひます。それから(二)知人の方の職業、肩書、年齢(幾つ位)等を附記しておいて下さい。若しお差支がなければ住所氏名まで知らしていただきます。こういふ質問に對して次の如き回答を得ました。

○　東京　楠瀨　日年

腹だゝしい時、悲しい時小理窟がひねりたい時、冷たい微笑で事を濟ます。その微笑から川柳が生れて來るなるべし。世の中に川柳家のハナクソ理窟程いやなものはなし。活動の新役者、劍劇の役者が遊びぶりのキザなるよりも更にキザなるものなり。昔より味噌をあげるものに事をしでかした例をきかず。殊には川柳屋の筋の通らぬ味噌程世間に迷惑なるものはあるまじ。そんなことを聞く度中風つきが死ぬのを待たるゝ心持ちに思ひ至る也。昔の川柳屋はすいも甘いも嚙み分けた人の出放題、それを今日ではおぼこ達がほんの眞似事、新も舊もあつたもんぢやないわいのう。

二〇

これはある政治家の言なり。

○　京城　横山巷頭子

(一)私の知人と云ふよりはむしろ崇敬する人に天民居士と云ふ人があります。居士は漢詩畑の人ですが、川柳をよく理解して居られるのみならず、まだ〳〵川柳はより以上開拓する餘地があると云はれてゐます。只今の革新川柳を見せたら定めし面白い議論があるだらうと思ふがまだ御目にかけません。劍氏の『咳一つ』の句は大變にほめておられます。

(二)銀行頭取(前朝鮮總督府財務局長法學博士和田一郎氏

○　本溪湖　森　立名

(一)輕妙洒脫その間骨を刺すが如き皮肉のあるを尊ぶ、誠に川柳は機智とユーモアで織られた民衆時代產出の藝術品である。

(二)滿鐵社員　大連市花園町　鏑太郎(卅六歳)

○　神戸　若林吐露樓

(一)私はやはり川柳と云ふものは傳統

でなければならないと思ひます。何故ならば川柳と云ふもの自身が傳統であつて傳統を離れて川柳はあり得ないですから所謂革新とか云ふものは川柳の畑とは思へません。しかし娯樂雜誌にある樣に卑俗な戯作的なのは同じ川柳であつても末の末であつて、矢張り讀んで見て人生觀を味はひ得る價値のある句でなければ生きた川柳ではあるまいと考へられます。

（二）土木業　神戸市榮町　高谷泰弘氏（三十九歲）

○　京都　皆川　羊白

（一）川柳とはあらゆる凡ての人間味で以て正直に揑ね上げた丸藥である。殊に川柳作家は大半は川柳に詩想が乏しく惡い意味の興味中心主義で安んじてゐるのを嘆ずる。この意味で傳統派＝革新派＝の對立云々はナヤンチヤラおかしい。退歩的なものを問題にしないで默殺するのが進歩者の取るべき道である。現今の柳壇に於てこれを痛切に感ずる。

（二）裾模樣製作　京都市蛸藥師新町西入　舟越宇之助（卅歲）

○　山口　磯部　孔雀

（一）川柳は今傳統派と革新派とが對立してゐますが早く落ち付く所までは揉み返さなければならない。寧ろそうした問題よりたゞ自己の進むべき道をつまり個性を生かすのが一番かしこいやり方であり又藝術に生きるものゝ取るべき道です今の川柳界ではその主義を爭ふがために個性を現はす事に氣がつかずにゐるらしい。これが最大急務であり川柳向上の近道である。

（二）神官　大樂白仙

○　岐阜　上松巨頭子

（一）個人としては銘々自由ではあるが大勢としては徒らに自然美を捉へやうとしたり、觀念的な句を作つて俳句に接近してくるのは興味がない。俳句とは別の方面を開拓してほしい。但し舊態をよろしとにはあらず。所謂バレの句をきらふべからず、バレを好むのではないが、それをも表現し得るやうな自由に四通八達にいかなる卑近美をも攝み得る用意があつてほしい。

（二）岐阜縣稻葉郡木田村　春日竹翠

○　松江　青砥不二綱

（一）川柳は十七字である處が俳句に似てゐるけれ共その内容は大に趣を異にしてゐる否俳句の方から云へば川柳の如くなることを最も恐れ戒める所で川柳から云へば俳句の純文學的なるに對して、諷刺、滑稽、洒落、皮肉等を骨子とする所にその特色を有するのである。ナゞ近頃劍花坊氏等の川柳の傾向を見るに如上の諷刺とか皮肉とかの外に更に有る自然の情調をそのまゝに叙したものが作られてゐる。是れ等は俳人から見れば殆ど平凡にして取るに足らぬものが多いけれ共川柳と云ふ側から云へば一の開拓でもあらう。

一體ある十七音字に依つて構成された作品に對してその詩趣を本質的に鑑賞す

る場合、それが俳句だとか川柳だとかいややうな標題は無用のことであるけれ共その表現の形式なり内容なりの如何はそれを川柳としては價値があつても俳句として取るに足らぬ場合はいくらもある。

五十鈴川濁らず二千五百年　劍花坊

これは勅題『河水清』の川柳ではあるが單に一つの概念を叙したのみに止まつて未だ五十鈴川の詩的情趣には觸れてゐない。二千五百年、三千年と星霜を閲しても五十鈴川は清澄にして濁らないと云ふ一つの事實――或は理屈？……を眺めた場合は川柳としての傳統的觀察に觸れてゐるけれ共、詩としては餘りに表皮概觀に落ちてゐて價値に乏しい。斯ういふ作例を上げれば際限がない。

劍花坊氏等の川柳の新しい傾向も惡くはないが、俳句に似た淺薄なものであるよりか今少し方向轉換を試みた方が面白からう。

（二）俳人　野津嘲水

○　橋本二柳子

（一）私は川柳に就いては全く門外漢です。然し乍ら是に對する愛好心丈けは持つてゐます。川柳も矢張り俳句と同樣作者とその句とがぴつたり合致してゐる處に眞の味があるやうに思ひます。即ち句に對する眞劍味がなくてはならぬ。已むに已まれぬ内心の藝術が川柳と云ふ滑稽的短詩として表現されたものでなければそれは蟬の抜け殼のやうな空虛なものであると思ふ。昔からの川柳を味はふ時に妙味の津々として湧き出づるものが隨分多いやうですが（それは素人としての私共の目に入るのは所謂天下の名吟のみが洗練されて殘つてゐるのかも知れぬが）近頃のものは技巧にとらはれた作意機智でも申したいやうなものが多いやうに思はれる。私には川柳を作つた經驗はないが俳句よりも更に斯うした餘韻におちいり易い性質を持つてゐるものでせうか。

（二）教員　橋本助太郎　四十歳）

○　神戸　富田　青波

（一）從前父の許に生活しておりました節には父母兄姉その他が堂上人として、或はその友人として和歌に親んでおりましたので、私も自然にそのグループに誘はれて和歌以外のものは知りませんでした。唯俳句と云ふものが和歌によく似たものである位に存じてゐましたのが、○○博士へ嫁ぎまして夫の趣味の俳句に導かれましたがどうしても俳句に親しむ事が出來ませんでした。そして自分勝手な川柳味を味はふ事に興味を持つてゐましたが震災以來獨身となり獨立獨歩の體驗を得るため以前より以上に川柳の深刻さが判つて來ましたが、作句又は味はふ餘裕のないのを遺憾に存じて居ります云々

（二）子爵令孃にて○○博士に嫁し現在は未亡人にて職業婦人として新開拓を求めて新生面を得んとしてゐる四十四五の婦人。

（以下次號）

女人高野同人吟行

川柳雜誌社の吟行と云へば降りかけた天候でさへ不思議と晴れる前例となつてゐるので天氣のことなどは、少しも氣にかけず三月の第一日曜(七日)に女人高野へ出かけることにした。今回は顔ぶれを社の同人のみに限つた。九時半迄南海食堂で待合し、來ない人を殘して同四十六分に乘車した。車内におきまつたのが路郎師をはじめ松郎、かほる刀三、馬行、松雨、芦穗、二柳子、多聞、双柳、万よしの諸君と僕の十二名であつた。

長野で下車した。先登には芦穗君と二柳子君が肩を聚べ少しく離れて中程には路郎師、刀三、馬行、多聞君等盛んに氣焔をあげつゝ進み、しんがりには太い松雨君と細い松郎君が續く。道はいゝし天氣はよし。風は少しもない。英豆君の赤椿の句や霞乃さんの雲雀の句が幾度か同人の唇から漏れた。

田舍家の軒下に殘雪を見つけてよろこぶ同人雪か嚙ながら進む。僕は酒を離さない。一里十八町は一笑の内に過ぎて、女人高野後村上天皇行宮所別格本山天野山金剛寺とした長い名の立札を後に昔の寺跡を左右に眺め五佛堂に參拜した。女人高野は以前は尼さんの學校まで出來てゐたが今では二人の尼しかゐませんとは堂守の述懐であつた。僕は同人が寄せ書をしてゐる間に、南海の庶務課長、鴻澤樂居氏の紹介で院主さんに面會を求めに行つたが、生憎不在であつた。若僧が御案内はいたしませうとの事で「當寺は聖武帝の御願により僧行基の建立せる物にして中興後村上天皇の行宮せられし寺なり。右に見ゆる多寶塔内大日如來は佛師春日作、左の破風作り御殿は觀音堂後村上天皇の觀月せられし舊跡なり」。一ト通り説明の勞をとられた。それから御寶物を拜觀した。主なる物は非理法藍天の菊水の旗後村上天皇御遺愛品正成公の正行公に讓られし名短刀、キリシタン禁止の制札、其他珍寶が庫に滿ちてゐた。そこを出てから本寺に到り、南北兩朝の行宮せられた居間や庭園を拜觀して畫舫の御馳走になる。綠側で日光浴をしながら女人高野の雜感を詠んだ。歸途長野の溪流で吟行の紀念撮影をした。撮影を終つてから三日市の油屋錦溪温泉にひたり、一日の埃りを洗ひ流してから、女人高野雜吟を披講した(朝陽)

▲女人高野雜觀

われ亡きあとは寶刀として殘り　路郎

南北兩朝四箇年間を隣り合ひて
この地にゐらせられしと聞きて

お隣へ歌まいらせし日もあらん　同
南朝の　御座所　勿體ない　狹さ　蘆穗
天野山塔の尖から晴れてゐる　同

御村上帝の行在所を拜して

如何になぐさめ奉りしか鳥の聲　松郎
また菊の　紋が目につく　金剛寺　同
金剛寺　猫　脊の　僧を　奥に見る　馬行
金剛寺　聞くと　殘るは　柱だけ　同
天野山　櫻　咲く日　を待　つ如し　刀三
行在所何處からとなく風が吹き　同
國寶の　外　改築　の　金剛寺　二柳子
その苔にまで　南朝を　偲ぶなり　松雨
雪かき　にちと　姦しい金剛寺　かほる
行在所は知らぬに鶯啼いてゐる　万よし
天野山　ぢつと　動かぬ日が當り　多聞
南北　を今も　行在所で　論じ　双柳
女人高野とは名　ばかり　尼二人　朝陽

近作柳樽

麻生路郎選

今一度世に出て呉れと見雛はれる　螢ヶ池　白蝶
看護婦の白さ參觀あるらしい　同　同
雨傘は話が込むで軒へより　同　同
心中をするにあぶりに海が風ぎ　同　同
ほだされて御恩に着ます金を貸し　同　同
女房の地味に着て出た寒い朝　同　同
拜んでる前へ賽錢音を立て　同　神戸
我も亦子に欺される身となちむ　同　隨帖
極樂を信じたらしく兒は寢入り　同　同
味知つて呉れたお客とよく話し　同　同
金蒔けばいよ〳〵淺間しき藝者　同　同
傷らぬまゝの鏡が淋しうて　大阪　同
白粉につたう涙を知るものか　同　同
人の子の哀れおちよぼの細い帶　同　同
こぼれるが如き醫にふれさせず　同　同
藏のある家の子供も泣いてゐる　同　同
ののしつたお前はそれでいゝだらう　同　同
ほぜつた火チラ〳〵と赤い寒さ　同　しける
見し居れば面白く減るミシン糸　同　同
明けて行く汽車メリヤス工場らし　同　同
舞ふてゐる埃り一つかみに足りず　同　同

操行の通りに墨が減つてゐる　山梨　天花
その事の起りは梯が落ちた場所　同　同
一苦勞する相談に爛が冷ね　同　同
もう寢てる丁稚へ一寸用が出來　廣島　露斗
大阪でやつぱりかごの鳥の娘よ　同　同
御意見へそうだらうがの氣がおこり　同　同
久しぶり逢ふ恩人のほほは落ち　姫嶋　眠聲
建設地又住友がこゝも買ひ　同　同
妻が來てもう沓下へつぎも出來　同　同
學校を終ねた許りを顧りみず　松江　雪緒
座布團の數を揃ねて春が來る　同　同
登記所の窓にも春が來るのなり　同　同
干し竿の大きくたわむ敷布團　同　不二綱
急停車寢てゐる人が羨まれ　同　同
證人になつて敵娼つく度胸　同　同
從姉妹とは思へぬ程によく似合ひ　三重　笑郎
あきらめる時は金さへ切れてゐる　同　同
里親のくせなご話し肩をもむ　大阪　欣女
雨だれに調子合はせて針運び　同　同
たつたこれだけが嬉しい雪が降り　同　彩秋
入學難親は府立をあきらめる　同　同

一合は息子が呑ます父の酒　同　憲翠
母親の小言に爪を切り終り　同　白鷗
始めから買ひよい店にして仕舞ひ　山口　同
ひらめきもせず天才の若く死に　同　吐露樓
破損品程に並べたラヂオ店　神戸　同
部屋の隅々まで社長居る氣配　同　桃哉
花の山繪で見た樣に花はなし　螢ヶ池　同
安靜を破らんとする蠅もゐる　同　鳴尾
金魚鉢の中に金魚が二匹ゐた　同　ロンドン
高い梯子天までとゞくよいはしご　同　玉仙
意味のある親切今日もしいられる　和歌山　同
數入りの丁稚の言葉變つて居　同　戲多通
寢臺の中で女の咳がする　大阪　同
好い人だねねこ校長ほめられる　同　夢坊
もう少し讀みたいここで電車着き　同　深春
落語家は時々客を相手にし　同　一狂
能樂の歸り足重うなり輕うなり　同　神戸
こゝばかり睦じさうなラヂオなり　同　柳一
お復習は嫌た飴屋の音がする　同　大阪
病氣して友達の有る幸福さ　同　靜雲
かみ結の歸つた後でまだいぢり　同　同
運轉手待つ間は客の氣で座り　同　史朗
ややあつて社長はヨンと云つたのみ
候こますで無學の手紙が來
自動車へ乘せて戴き淋しがり

ませた子を育てゝ養母氣がもめる　鶴ノ莊　菩天
兒のべべを縫ふ樂しさを語り合ひ　和歌山　節太郎
赤ン坊を仰せつかるも姉の家　神戸　ひで一
風呂を出るこよいお天氣になつてゐる　石橋　默太
人事にしては餘りに詳し過ぎ　神戸　志郎
前借の話は腰をひくう掛け　大阪　聞路
若後家のなぐさめられて惱みそめ　同　一文字
番頭に强く妻にはごく弱く　神戸　郊村
貧乏は子供の知つた事でなし　同　半休子
賣り家と定めて矢鱈に釘を打ち　同　南天棒
飛行機に蹴を片手の人が立ち　和歌山　德雄
高利貸可愛想だと思へども　大阪　南汀
ねえあなたあなたも三味線覺えない　同　かず枝
外聞もなく吸入口を開け　平壤　柳也
心から出た尊さへ逆へず　島根　木屑
しんまいは頻りに眞面目さを見せる　大阪　春莊
信心を奬める母の痩せて見え　東京　秀花坊
要領を得て安心な飯をくひ　大阪　三平
向ひから向ひへ嫁を貰ふてる　同　正石
ながいこと待つて夜櫻寒くなり　螢ヶ池　其象
年々に母の身體の小さく見え　東京　周情
恩人へせめて御繩頂戴し　豐中　案山子
モーよいと云つて藥を二日分　大阪　武骨
醉ざめに炊事の下駄の小さ過ぎ　同　山月
約束を守つて女年を取り　同　乾坤

犬

カタトの犬は省二氏の愛犬です。同氏は非常な犬好きださうで、この寫眞は素人の寫されたものだと聞きましたが載せて見ました

蛭子省一

菅笠で犬にも旅の暇乞(初篇)

人生慰樂の三分は犬の賜だと思ふ、繰返して讀む美的百姓の著『みみづのたわごと』にも、よく犬が出てくる、私に一疋の犬がゐます、孝究の揚げ句『無垢』と命名した、華嚴經に國名無垢琉璃爲地に因つた、病氣をよくするもので座敷で徹夜の看護をします、曹通の藝當は自ら何んでもやります『お辭儀』が上手です之れ以上には可愛そうで教へられぬ。

槳取やつぴし犬に手を貰ひ(二篇)

日本書紀『火酢芹命の苗裔諸隼人等が天皇宮墻の傍を離れず吠狗に代りて事へまつるものなり』神代前に犬がゐた證跡は明かだそうで、石器時代から家畜となつてゐたと埃及の紀念碑などから學者が說いてゐる、私は桃太郎時代からで結構です。

料理人ひよつこほつてかみ合せ(三篇)

まだ鬪犬を悅ぶ惡慣習がぬけぬ、朝鮮では犬を食用に供して居ます、彼れの母親もやられたのです『無垢』もいつ同じ運命に遭遇するかわからぬので心が許せない、今度諸氏からの句は保存して色々の意味に役立たせようと思ひます。

御駕からわんこいはれる茅花賣
丸の内窓から犬をけしかける
分散に狆をば醫者へ押つける
籠かけに四五間先で犬がじやれ
狆を呵つて檢校を座に招し
わたしを馬鹿にしやすこ狆を抱
急く酒つるんだ所でひつたくり
ぢつと目見へ狆に吠へられる
まき添へを資朝犬にほへられる
岡寺で勅使を見ると犬が吠へ

二十四篇迄の内十句を採つてみました。

大家を夢想して

井上刀三

川柳はなぜこんなに進歩しないのでしようか。柳壇はなぜこんなに貧弱なのでしようか。質の良否は兎も角昨今は、柳誌も續々發刊されて、研究に主張にそれ〴〵過分の努力を拂つてゐるぢやありませんか。

作家は作家で口角泡を飛ばして、それがたゞへ愛すべき稚氣だと假定しても、作句に研究に寧日遑なしと云ふ狀態ぢやないですか。それにこの有樣はどうです。

柳壇は、本當に莫迦々々しくも十年一日の如く、無價値な廻轉を續けてゐるに過ぎないのです。

僕は今迄川柳家の口から、川柳は平民藝術として至上のものだとか、やれ優に短篇小說の縮圖だとか、人生詩としての川柳は俳句の遠く及ばざる所なりとか、耳が韋魚になる程聞いて來ました。

しかしこれ等の言葉、いや興奮はですね。現在柳界を靜視する時、殘念ながら慘めな氣焰に過ぎないぢやないかと結論するより外ないのです。で、僕はまづ八右衞門君は偉大なる我が川柳の創造者として、兎も角それ以後の川柳家の無智と冗漫な作句態度を實際憎まざるを得ないのですよ。何故もつと內容に表現に、眞面目な熱を持つて吳れなかつたのだらう。そして何故もつと芒蕉か一茶の樣に飾り氣がなかつたのだらうか。他の文藝陣に無茶なりにでも何故鋭く迫つて吳れなかつたのであらうか。そりやあの痛快な丁髷を戴いて矢立で作句した時代の事ですもの若干は無理ない事なんだけれど、こんな事を言ふと奴さん達地下から『手前共が勝手に川柳をけいじつだなんて決めてゐるのぢやないか、手前を見ろ、お前達がいやに力む今の柳界の態はなんだい』と冷笑するかも知れませんが、極道息子が佛を怨むと同樣に、鼻唄まじりで一句を物にした時代の川柳家をつく〴〵口惜く思はざるを得ないのです。

それにしても、これはまたあまりに蟲のよい話かも知れませんが、今日では社會も、も少し川柳を認めてくれてもよい筈ぢやありませんか。僕達をも少し買被つて吳れてもよい譯ですよ。

僞善者は體裁のよい事を言ひますね『吾人は社會に對して川柳の如何に至上なるかを力說しつゝあるのだ。畢竟準備時代なのだ。なんぞ目前の小利に拘泥せんや』ですて。けれども僕は後世川柳家の功成り名遂げて揚々凱旋せんとする時、その行列の先走りになるなんて、考へても厭ですよ。當選をした議員に御禮の言葉どころか、あべこべに橫面を一ついかれる筆法ですからね。

こう言ふと僕は甚だエゴイスト過ぎるかも知れませんが、せめて僕達の眼

の黒い内に川柳黄金時代が來てほしいものですな。僕達の子孫が、僕達の句を見て笑つたつて、そんな事は敢てかまはないぢやありませんか。

大體川柳なる名稱が第一僕には不愉快なんです　茶一つにしたつて、川柳は水準以下の下等品ですからね。途上ふと茶舗に立つ時川柳と書いたあの調和を無視した靈の存在は實際情なくなりますよ。

ごう考へてみても川柳てふ名稱はこの偉大なる藝術の名詞としては矛盾も甚だしいぢやありませんか。僕は由來川に柳なんて云ふ風景が、いやに風流すぎて癪で堪まらないのです。全體が腐敗した樣にたるみ切つて、其處には何等統一した緊張味がないんですからね。

空想と云ふ奴は美しいとか言ひますが、實際堪まらないですな、僕は此の間も、とりとめもない空想に花を咲かして獨り悦に入つてゐたのですが、その空想が段々單なる空想ぢやなくなつて來るではありませんか。

實はこうなんですよ。

勿論僕は既に大家になつて居るのですがね。

× × ×

數日前より方々の雜誌社から次ぎ次ぎに依頼された川柳原稿のためスッカリ疲れ切つて外は麗かに、かれこれ十二時といふに情眠をむさぼつてゐた時、妻の奴とんとんと上つて來るぢやありませんか。アヽまた原稿の督促だナアと瞬間憂鬱にならざるを得なかつたのですが……矢張りそうなんです。

『短詩藝術』の記者が見えてね、御願してある原稿を頂戴したいてよ』

『明日來てみて下さいと言つておけ』

と……僕は何時もこの『明日來て下さい』を亂發して刹那の債務を果すのが習慣になつてゐるのです。で記者仲間でも僕のこの『明日來い』にスッカリ弱り切つて、何時とはなしに『紺屋の表』なるニックネームを頂戴してゐる相ですがネ。

川柳春秋は、僕が何時も辛辣にやつつけるものだから江戸の仇長崎で隨分ひどい批評をしますよ『血と土』に發表した僕の人生派川柳を批評するに、彼も亦老ひたり突といふ調子で揶揄するんですからね。しかしこんなのに一々構つてゐた日には僕の身體が幾つあつたつて堪まりませんよ。

三伏の暑さといふに、新年號の仕事にかゝるといふ始末、こういふ仕事は孫子の代までもさせたくはありませんな。旅行でもして暫く樂天的になりたいと始終計畫しますが、何時も空想に終るのです。

『花咲かば』ですか、ありや僕の初期の作品を纏めたものですがね。十版も出し兼ねないといふ好評で出版屋もほくノ〳〵ものですよ。

時代の推移といふ奴は恐ろしいもの

ですな、それにしても嘗ては僕達も川柳革新、川柳藝術論を囈氣になつて呶號した時代であつた　ですがね。

× × ×

此時私が不覺にも欠伸と失笑を發しなかつたならば、この愛すべき夢想家Hは興奮に興奮するがの樣に尙も空想のあとを嬉しくも追つた事であらう。

（三月十六日記）

新戎橋より

万よし生

○友人池田多助君歐米教育視察一ケ年今春歸朝。曰く、英國の教育は傳統的紳士教育にして、小學から大學までの生徒がみな落着きのある支配人の卵子の樣である　蹋逸の教育は科學的專門的で　皆馬齒鬱に甘んじて生産そのものゝ一分子たらむと心掛けてゐる。米國の教育は程度は低いが自由奔放の空氣に滿ちてどんな事を仕出かすかも知れない壓迫を感ずる樣である。日本の教育はあまりに試驗的注入主義で自由研究の餘地がない結果學問が高くして人間が低い。知識があつて活用が出來ない結果に陷つてゐると、古川柳研究家も現代作家も他山の石として味はふて見る價値があると思ふ。

○駄洒落をいくら連發しても座興を助ける外人生に貢獻することは少い。

○川柳は取材と表現の尤も自由なる人事詩なり。

○詩とは人間向上の記錄を言葉のリズムにより美化したる創作である。

○自然は詩にあらず。自然が主觀を透して表現せられたるものが詩であり繪であり川柳である。

○川柳と漫畫は平民のもので繪畫と俳句とは貴族のものである。

○宗教は天上のもの、狂句は地上のもの、川柳は天地の間に蠢く。

多くの女に接したものが女を理解する譯でなく一人の女を深く知ることが女を理解することである。

○乞食根性でなく天職と信じて自活してる人がプロセント何くらあるか。

飢えた狂犬

安川久流美

『あなたは藥屋さんですか？』

『さうです、私は藥屋です』

『……』

『あなたは、どうして私を知つてゐますか、私は貴方を知りませんのに？』

『ナニモ不思議はありません、私はあなたを人間だから知つてゐるのです』

『それは又可笑しな御返事ですな、實際變だ。あなたは私を嘲弄してゐるのではありませんか』

『いゝね、私は眞面目です、あなたこそ、一風變つたお方だと思つて、私は

いつも路上に見るのです』
『どんな點がです』
『あなたは、いつも可愛いお孃さんを左の方にダッコして、右の手に飼犬を引っ張ってゐるじやありませんか、一體あの場合どちらが可愛いのですか、正可犬の方を、お子さんより愛してゐるのではありますまい？』
『勿論です！』
『そんならあの犬を捨てるか、さもなくば他人にくれてやりなさい』
『そんな事はあなたの干渉を受けなくとも私の自由です』
『イヤ、それではあなたが、あなたのお孃さんを眞實から可愛いのではありません。あなたの飼犬は、あなたが食物を與へてゐる間は、あなたを主人とつてゐますが、もしも一片の肉も與へない時になつたら、屹度、犬は慣つてあなたのお孃さんの柔かい肉を咬むかも知れません』
『それは近頃恐ろしい話をきくものだ――私の犬は、そんな犬ではありません』
『イヤ〳〵、あなたの犬は飢たる時は狂犬といふ犬になるのです』（完）

日本吟行

西垣松雨

變りまして變りばへもありませんが川柳雜誌の連中を引っ張り出しまして一寸一席申し上げます。
○『オイ何を路郎〳〵見てゐるんだよ、そう松郎〳〵歩いては莢豆まで行くに何日かゝるか判つたものでない、月兎足を早めて……』と言つた處で馬行の樣にかける譯にも行くまいが、ちと何とかせんといかんなア』
△『あんたそないに言ひなはるけれどこれはわての柳路で、迚も放馬の樣に双柳歩き方は出來まへんよつて、マアそないに言はんと何刀三御顧ひですさかい洲馬からすま迄徹底郎するまで見物して古城山は申すに及ばず蔑乃繁り蘆穂はびこる雅幽の處も美の作ぬ樣卯の助鷹の眼で見て行きまへうかいな』
○『それもそうだ、史風かほる花童子の園を一洲するも革郎助六の出る芝居を見るのもよからう、右大臣の祭つてある處や、彦造權見の社に參るもなか〳〵輝翠なものだ　其昔駒人が默闇して啞人となつたといふ古跡もあるんだからなア』
△『そやさかいにマアゆつくりしてあまり柳骨を折らない樣に二柳子〳〵とブラついて行けや多聞萬よしでも一本つけて待つて居ましやろさかいに』
等とワイ〳〵と申しましてこれから吟行を致しますのですが、樂屋の方で一聲掛りましたのでお後と交替を致します松雨〳〵お待ちを……

募集句

硯

坂井久良岐選

級長の硯の角がかけてゐる　春荘
二年生硯を重いものに持ち一路　一路
いゝ知恵も浮ばぬうちに墨がすれ　千鳥
帳場から硯取りよせ左馬志郎　志郎
硯箱頭の取れた筆もあり　眠聲
女鏡の代り硯を置いて書き　隨帖
證文を書かせる硯持つて來る　のぼる
水引を掛けて硯へ手を伸ばし　木屑
隣から硯と葉書を持つて來る　柳一
文具屋のウィンドで見た大硯　憲羣
朝と云ふ氣持硯の蓋をあけ　一雄
眞ん中の見事に減つた硯石　萍雨
硯箱あけて代書は客を待ち　南天棒
受付へ使い古した硯箱　曹天
硯箱落して下女は叱られる　郊村
筆不情なれど硯はよく光り　天窓
硯摺る暇も母親思はれて　笑郎
硯より知らるは戀の手紙なり　案山子
隣から硯を借りて來る葬儀　無心
硯かっそれとはなしの墨見され　玉仙
筆を嚙み〳〵硯へ眼を落し　朝陽
墨もないしこんだ硯局は濟き　突支坊
掛取へさかさに硯貸してやり　三平
火にあたり乍ら硯する寒さ也　清春
硯へは一輪挿しの水を借り　柳聲
堀り出しの硯本堂自慢がり　柳秀
硯石いつも奇麗な社長室　三次
病上り硯の墨がすりかねし　宮呂
代書人硯箱からつりを出し　拔天
雨だれを硯にうける二階借り　武骨
硯へ度忘れの文字書いて見る　夢坊
賑やかに硯を洗ふ夏休み　雪緒
拜啓と書いて硯をすり直し　山雨樓
硯の水凍つて寒の入りを知り　深春
水引を掛けて硯の蓋をあけ　山月
尋常科姉の硯を小さがり　一文字
上書を賴む硯はきつう摺り　聞路
幹事部屋仲居硯を持つて來る　史朗
硯から句想が生れそうに摺り　万よし
硯箱使へぬ筆が二三本　天花

川柳家の戸籍調べ

□　係　馬行生

(一)姓名(二)雅號(三)別號(四)現住所(五)生年月日(六)職業(七)好きな句(八)好きなタイプの女(九)自信の句(一〇)川柳以外の趣味(一一)配遇者の有無(一二)嫌ひなもの(一三)川柳に手を染めた年月

(69)　窪田銀波樓

(一)窪田俊一郎(二)銀波樓(三)流月(小說夢之助(劇評)其他數種あり(四)金澤市裏古寺一八の二(五)明治十年一月生(六)新聞記者(七)調のいゝ句、新らしい思想を約束づけられた川柳の調子に嵌つた句(八)日本髮の優しい女らしい愛嬌のある女(九)未だなし(一〇)劇浮瑠璃なぞ(一一)有(一二)蛇、お世辭(一三)明治卅七年日露戰爭の當時

(70)　住　夢　遊

(一)住石松(二)夢遊(三)大井良雄又は大井默念(四)神戸市東尻池一三二の一五五(五)明治二十九年四月九日生(六)鐘紡從業員(七)大體に輕い調子の句(八)ごんな女でも好き、就中肉つきの好い快活な女(九)「流連へ今日は歸れと陽が當り」(一〇)落語、喜劇、登山等(一一)有(一二)別に取立てゝ嫌いなものはありません。(一三)大正十年頃から雜誌の文藝欄へ投

提灯屋成程と云ふ硯なり　同
お手本と硯汚して出來上り　吐霧樓
御揮毫の硯へ一人附つ切り　同

三　光

（人）宿帳に硯を添えて恐れ入り　千鳥
（評）恐入りにて其番頭の慇懃を能く描寫せり
（地）得心をさせて硯の蓋を取り　三平

（評）他の凡想に比し多少事件の深味あり
（天）夏服に硯のいものにされ　其象
（評）硯と云ふ題の着想が悉く狹く淺く平凡なりしは遺憾なり古川柳の「向ふから硯を使ふ掛う人」の滑稽もなく少しく選者を落膽せしめしが今此句を得て稍々會心の笑を生ぜしめし事を喜ぶ。
（軸）愛硯家指し硯を撫でてゐる　久良岐

風邪

風邪引に晩はばつきり解つて居　夢坊
賣藥屋その風邪聲へ世辭がよし　天花
生酔の連れもその夜の風邪を引き　隨帖
風邪引きの母を憶へば暗くなり　笑郎
洋裝は今にも風邪を引く姿　拔天
改札の風邪と覺ゆる喉を卷き　普天
風邪と云ふ遲刻和服の儘で來る　木屑
亭主から見ると氣まゝな風邪にし　史朗
風邪引きへ母アスピリン〳〵　無心
御發展なぞと風邪引きからかわれ　一文字
母親が云つた通りに風邪を引き　山雨樓
風邪引きの蒸てんぼうの布團なり　深春
受付で風邪氣のまの事務を取り　雪緒
御無沙汰の風邪じ困つてるると云ふ　彩秋
交換手その風邪引きがあからさま　默劍

林田馬行選

風藥呑んで明日まで寢るとせう　郊村
風邪心地讀みたい本を出して來る　德雄
風邪引きが二人暖爐の傍へ寄り　萍雨
風邪引きの顎は短かく隱れし居　かず枝
土曜日の夜店で風邪を貰つて來　憲翠
言譯の丁度われから風邪でして　眠聲
風邪引いた事も不孝の一つにて　春莊
風邪引いて以來首卷辭になり　千鳥
素うどんと一夜藥へ一つ咳き　太平樂
風邪引きのまで氣輕な旅に立ち　三平
風邪こるだけでその後がない日記　桃哉
風邪引いた女の姿それもよし　其象
風邪引きへ起きねばならぬ客が殖え　柳秀
風邪引きの見られてならぬ姿ち　助六
待ちぼうけまたの上に風邪を引き　山月

句とも川柳とも分らぬものを投書してゐましたが大正十一年末頃から新聞柳壇へ投句し初め、それと同時に句會へも出席するやうになりました。

（71）加古しげる

（一）加古作次（二）しげる（三）なし（四）大阪市南區高津七番丁二九高馬方（五）明治四十年五月七日（六）叔父樣の店の手傳ひ（七）數、切れぬ程あります、最近の川柳雜誌上では「あまかつた後の皿とは見ぬなり」莢豆（八）さあ……（九）これから生れる句（一〇）取立て、云ふ程のものなし（一一）無（一二）水掛論　揚足取り（一三）大正十三年春

（72）西村山月

（一）西村山月（二）山月（三）巖の字（四）港區八幡屋町二四八地（五）明治廿五年五月九日生（六）市電氣車員（七）路郎先生の川柳ふところ手。同川柳染遊び。武玉川中にあります（八）温順な家い締りのある女（九）「村近一日傘たゝみ別れ道」山月（一〇）旅行、寫眞、外に小唄、琵琶歌落語聞く方（一一）有、子供の出來る藥をお知らせ乞ふ（一二）病氣　借金を返す時酒、煙草、口論（一三）川柳雜誌の創刊頃から初めました。

（73）三條東洋鬼

（一）三條政治（二）東洋鬼（三）東坊寺秀夫

風邪引きを濕布で知る琵琶の會　武骨
百圓も捨ふた夢に風邪を引き　のぼる
風邪で寢てゐて友達によく話し　飯山
風邪で寢てゐては芝居がいゝさうな　吐露樓
須磨明石丁度夜明けに引いた風邪　同
風一つ引かぬ繼子に智惠が付き　万よし
父の死をまざ〳〵憶ふ風邪をひき　同
風邪引きをはつきり聲に見てゐる　聞路
處方箋これもおんなじ風藥　同
風邪引いて簞笥の汚れよく目立ち　悟郎
風邪で寢てゐるへ不渡の戻て來　同

佳句

風邪ひいて話半ばに鼻をかみ　助六
風邪引いて只要るだけの聲を出し　隨帖
留守宅で案じた通り風邪を引き　杏三
風邪引かぬ一人手馴れた米をとぎ　悟郎
債權者私も風邪を引いてゐる　一路
木賃宿寒遲れたのが風邪を引き　白鷗
駈落の落ついた頃風邪心地　のぼる
風邪引いていつそ「キング」一面白し　吐露樓
「その他多勢」風邪引いたのも混つて居　飯山
(軸)風邪心地續く不過の膳に付き　馬行

近來本欄が非常な勢ひで膨張して來たことは嬉しい。本選の如き五十八人と云ふ數を示してゐます。その中十八人も全沒が出たのは甚だ遺憾です。この上の努力を祈ります。本來「風邪」と云ふ題が出るとすぐ玉子酒、高座の風、風邪體にして缺勤、うどんやの風藥と云ふ風に十人が十人の頭へ來るものです。然しこした想は是迄の誰かに依つて巧みに詠まれてゐるものと見て間違ひはないのです。ですからこうした境地は初めから素通りするか。又は餘程巧みに詠まないと句が生きません。と申し上げると甚だむつかしいやうに取れますが。常に句を讀んだり句作してゐますと自然に諒解がまゐります。

尙本選の句稿は僕の手許に保存してありますから、沒吟は入選句に對し質疑に付いて喜んでお答へ致します。(二月十五日馬行生)

下宿

○　輝翠　選

下宿屋のこゝにも豆の皮が散り　深春
國の父暗い下宿へ尋ねて來　聞路
下宿屋のよくもあれだけ住めたもの　一路

森田輝翠
岩崎柳路　共選

下宿屋は死別以來の思ひつき　木屑
下宿屋で浮世離れた日が續き　志郎
釣り合わぬ緣で下宿の娘は聞かず　抜天
下宿でもやろうかと思給考へる　杏三

(四)神戸市元町四丁目七八(五)明治三十九年四月廿一日生(六)會社員(七)感傷的な緊張味ある句、古川柳の一部(八)洗練された美を持つた中年の女、むしろ冷たい感じのある氣品が欲しい(九)直ちに答へ難し最近の句程自信を持つ(一〇)將棋ピンポン、讀書(一一)無　(一二)若い者を輕視する川柳家、句を見ずに雜誌さへ出せば偉いと思ふ川柳家、句を鑑賞せず傳統とか革新とか云ふ看板で以て好き嫌ひを斷定する川柳家(一三)大正九年の暮

(74)　宮島龍二

(一)宮島龍二(二)(三)なし(四)金澤市六斗林一丁目七番地(五)明治三十三年十月二十六日生(六)病中の爲め目下親の脛をかぢり居候(七)朝夕含味服膺する句は持合さず、是は好きな句が多過ぎる事を意味し申候(八)桃割よく、耳かくし行方不明も亦よろしく只兎角お婆あさんになりたがる女は厭にて候(九)誰にでも直ちにお目にかけ得る程の自信の句は無之折角勉强致す存念に候(一〇)獨身なる事を此際天下に廣告致置候(一一)硬軟、何んでもやりたく又大低は好きになるが目下の所は讀書と散歩が關の山にて候それにしても金と健康が欲しい(一二)牧師と坊主のお世辭笑ひは癪に障り候(一三)川柳は大正十一年の春より始め申候

下宿屋の書かたまつて降り來る　白鷗
下宿屋に我が子の樣に意見され　夢坊
下宿から見た世間とはチト違ひ　書天
下宿屋に怪我をしたのが殘るだけ　のぼる
養生に國へ下宿を上げて去に　隨帖
それ〳〵の個性を見せた下宿なり　三平
人生の悲哀下宿の冬となり　ト水
下宿屋に人のいゝのは使はれる　一文字
友人のことで下宿へ賴むことを　柳秀
奥さんを持て下宿へすゝめに來　吐露樓
思ひ出は下宿時代のこの葉　同
書留に愛想のよい下宿なり　松雨
下宿屋へ父親からの賴み狀　助六
下宿では從妹といふを心得る　万よし
盆栽の梅に下宿の春が來る　同
賣れ殘り下宿の庭へほうり込み　山月
爭議から下宿の一人引張られ　同
退校に下宿の借もそのまゝま　天花
下宿屋が立ひ校舍が近くなり　同
下宿屋を訪へばおさゝからの留守　眠聲
もう刑事その下宿へ手をまわし　同
下宿屋の友へ失職落ちつけり　憲翠
はる〳〵と出て來て下宿寂すぎ　同
下宿屋へ蒲團ごゝいて拾二月　春莊
下宿から省線までの惡い道　史朗
下宿屋の主人の方があわてゝる　かず枝
(人)其氣前先づ下宿屋を惚ゝさせる　無心
(地)下宿人顏刺り合つて出掛け　かず枝
(天)下宿屋へ來て高下駄を遠ざ　三平
(軸)洗濯の中繼ぎ下宿申し受け　輝翠

○　柳路選

下宿屋の壁一杯に着物掛け　柳一
もう刑事其の下宿へ手をまわし　眠聲
下宿代拂へば少し殘るだけ　太平樂
下宿屋に尺八が鳴り琵琶が鳴り　ト水
下宿屋は物價が高い事も云ひ　一文字
女文字の手紙下宿を賑わせる　無心
色街を離れて下宿してるなり　笛呂
下宿屋の娘少うしすれて居る　萍雨
生活の裏が見へてる下宿なり　聞路
下宿屋の二人の主義が共鳴し　山雨樓
下宿屋の壁へ張られたプロマイド　三次
下宿屋の屋根一杯に干す蒲團　一路
夜店から何か見つけて去ぬ下宿　春莊
下宿屋へ仲居氣輕に取りに來る　三平
書留に愛想のよい下宿なり　松雨
拘留が歸り下宿の賑やかさ　のぼる
何でもと云ふ身下宿人横たへる　助六
高下駄が下宿の庭に乾きゝり　史朗

秀　逸

ちと醉ふた姿下宿の戸をたゝき　史朗
あみだ籤してる下宿の雨續き　助六
爭議かゝ下宿の一人引致され　山月
電車から下宿へ戻る道が暮れ　隨帖
下宿屋は貯めて居るのを褒める　也のぼる
盟休にこゝの下宿が本部なり　天花
(人)盆栽の梅に下宿の春が來る　万よし
(地)もう一人歸る下宿の湯あがり　史朗
(天)呑まれて醉へば下宿に歸るまで　吐露樓
(軸)マンドリン提げて下宿へ友が來る　柳路
何かあるらしい下宿のデッカンショ　同

川柳書架（十七）

寛政改革と柳樽の改版

岡田朝太郎著

▲本書は法學博士岡田朝太郎（三面子）氏の講述になり、上下二册に分たれてゐる目次の主要なるものを列擧すれば左の通りである。

▲第一章寫政改革の素因。第一節田沼時代、第二節士風の頽廢、第三節災變と盜賊等の演行、第四節賭博の流行、第五節風俗の壞敗。第二章寛政改革の要旨。第一節將軍家齊と樂翁の補佐、第二節士風の振興、第三節財政の恢復、第四節風俗の匡正。第三章柳樽。第一節柳樽發行前變遷、第二節柳樽の材料、第三節柳樽の發行と內容（各項省略）

▲上卷一—一二六頁。下卷一二七—二二八頁。菊版。

▲柳樽の解剖、その當時の風俗人情、それがバックをなせる政治等に就ての細說川柳研究家にとつては全く至寶である、

古川柳眞髓

井上劍花坊編

▲本書川柳研究叢書の第一編である。そ

各地柳壇

松郎編

◇前號校正の日(二月廿五日)

校正のやり甲斐のない程に刷れ　刀三
再校の大發見を云ひに來る　同
魚を釣る氣味に校正直つて來　馬行
校正に筆者の癖を頷いて　同
うつむいたまゝ校正の小半日　二柳子

◇萬よし川柳(第廿二回)

出産　厩生路郎氏選

出産に男の足の踏みごころ　屏三呂
血のぬけた顔へ毋親給仕する　春夢
命がけ女房産聲聞きは聞き　笑月
兒が出來て見る斯うして居れる俺　花泉
安産の眼に里親の旅姿　月兎
ほつとした顔で産湯は眺められ　乾坤
出産の朝を亭主は座らされ　同
(人)恩給の暮しの中へ兒か産れ　南天捧
(地)逸早く鯉答樣へ燈を献ける　柿鄕
(天)出産の父には別な案じあり　助六

雀(第廿三回)　岸本水府氏選

群雀何か相談する形　乾坤
栖鳳の雀は赤い竹にゐる　屏三呂
追ふた夫飛んだ雀を不思議がり　聞路
藁運ぶ雀孕んだやうになし　南天捧
おとなしうしてゐて雀騒いでる　大夢子
(人)群雀波打つ稻に脚を止め　起草
(地)降りなさと思ふた雀戸樋に入り　花影子
(天)雀等にさしても樂しい朝さなり　山雨樓
(軸)こぼれたにぎり雀が飛んで行き　水府

次回題「初對面」五句　食滿南北氏選
四月二十日締切　大阪市南區新戎橋南詰
萬よし宛

◇萬よし偶會(二月廿二日)

萬よし報

樂隊の反古と知りつゝ手へ渡し　馬行
變人へ宛てるに反古の二三枚　同
他人から見る反古紙ほごのもの　二柳子
反古紙に表裝をして骨董屋　萬よし
あつけなく女優は反古にし了ひ　同

◇馬行居偶會(三月十四日)

妻と來て帽子の下がかゆくなり　刀三
帽子掛妻の嫉妬を脊に受け　同
帽子は帽子掛に親子の膳につき　松郎
留守を云ふて帽子掛を見上げ　同
帽子を見れば切れし日の事　馬行
中折の埃りは消ねて元の椽　同
卵を生む今日は夫婦の機嫌よし　刀三
現金をみんなまとめて出る夫婦　同
夫婦して冬暖う女を讀み　松郎
正夢であれば夫婦の別れ居し　同
灯の搖るゝ下に動かぬ夫婦あり　馬行
まごうかた無き夫婦も兒の寢息　同

の序を拔けば

序。古川柳眞髓。よしや、その眞髓なればとて、我等革新川柳人に古川柳が何の交渉ありや。曰く、大に有り、我等は川柳を革新せんとする者なり、單に詩を革新せんとする者にあらず。古川柳を知らずして、いかでか川柳をあげつらふことを得ん。古川柳を知らんと欲せば、古川柳の傑作を讀まざる可からず。古川柳の眞髓に觸れざる可からず。古川柳の愚作古川柳の皮相、また知るの要あるが如しと雖も、我等はこれに向つて革新の斧を加へんとする者にあらず、これを朽木糞土として路傍に捨てんとする者なり、これをを知るの要無からん。若し夫れこの書を作るに至りし徑路を知らんせらるゝ諸子は、乞ふ「古川柳眞髓出版に就し」を讀まれよ。記して序と爲す。井上劍花坊

次に白石維想樓氏の序文があるが、劍氏の序の細說とも見るべきものであるから之を略す。

▲大正十五年二月二十日發行。菊版半截二〇二頁。定價壹圓貳拾錢。發行所は東京市外杉並町馬橋原五四七柳樽川柳會。

▲井上劍花坊氏の手によつて拾はれた古川柳集である。句は万句合、柳樽・柳樽拾遺から選まれたるもの。句數約一千。

編輯後記

路郎生

▲今年は彼岸に雪が降つた。彼岸をすぎてもきわだつて暖かにはならない。が、やがて櫻も咲かう。

▲三月は第一日曜の柳談會を休んで同人吟行會にした。（別稿朝陽の記事參照）期らかな空に雲雀の聲を聞きながら歩くといふことは都會生活者にとつては、たまらない嬉れしさである。時々斯うした同人ばかりの吟行を催したいと思つてゐる。

▲新進作家の喜田飯山君が新に同人に加つた。從來本社の支部はナンバアの名稱を附してゐたが、今後は別記裏表紙裏の如くに地名又は特殊の名を用ひることに改めた。

▲一洲が幹事であつた神戸支部は、神戸市湊町一丁目電氣局西庄萬よし方へ移すことになつた。來る四月六日から廿日まで神戸萬よし（電話本局二八五六番）樓上で本社後援の下に全國川柳家短冊展覽會を開催することになつた。詳細は庄萬よし宛に問合されたい

▲高橋古城山が一身上の都合で同人を退た。

本社四月例會

◇時　日　一日午後六時より

◇場　所　大阪市南區日本橋一丁目交叉點北の辻東入南側　日本橋倶樂部　電話南三四二四番

◇兼　題　「雨傘」三句

◇會　費　三拾錢　初心者の來會を歓迎す

▲雅幽、助六、病氣のために四月號の川柳塔が來なかつた。刀三も病んでゐたがもう起きてゐる。美の作が病氣で大分悪るいやうに聞いてゐたので、莢豆と刀三と私と三人で見舞ひがてら遊びに出かけたら、もう餘程よくなつてゐた。晩餐會があるので出かけたいふ位だからもう大丈夫だ。留守に上り込んで話してゐるところへ戻つて來た。久しぶりに逢つたので話が大いにはずんだ。令息が大きくなつてゐるのに驚いた。

▲久しぶりに放馬をたづねた。昨日馬行君と二柳子君とが來ましたと話してゐた。放馬は相變らず漫畫を描いては奇聲を發してゐる馬行も放馬は愉快な男ですぜと わざ〳〵手紙を寄越した。

▲今月は莢豆が「助六を評す」を書いた。莢豆は默つてゐるやうで 隨分きついことを云ふと誰やらが言つてゐたが さうかも知れない助六をよく見てゐる。

▲四月は第一日曜（四日）柳談會を開く。誰でも自由に來て大いに喋べて貰いたい。

▲飯山は三月十八日に 鄉里香川縣で長男耕太郎君が生れたので十九日に歸鄉した。

▲柳路は井上劍花坊氏の宅の 近火に早速駈けつけてくれた。信子さんが喜んで來た。私も嬉れしく思つてゐる。

▲川上日車氏は八幡町から出る「太湖」の編輯を引きうけられたさうです。町の有志が出してゐる機關紙のやうなものです。購讀希望者は滋賀縣八幡町太湖社へ申込まれたし（一部拾錢一年一圓）

▲濱西健次君に電話西四七八九番が開通。

▲神戸の中澤濁水君は令閨が 子供を殘して病死されたので 高知へ歸鄉されるさうです同情に堪ねません。

▲大正川柳の四十二號、四十三號、四十四號五十一號、五十八號、百三十四號が缺本してゐるので重複又は 不要の方は相當の代價で讓つていただきたい。

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第三卷第六號課題

四月十日締切

（各題二十句以內）

▼犬　蛭子省二選

▼煙　麻生葭乃選

▼辯士　原史風　高橋かほる　共選

第三卷第七號課題

五月十日締切

（各題二十句以內）

▼職人　森東魚選

▼僧　矢田右大臣選

▼齒醫者　關本雅幽　西垣松雨　共選

毎號募集

▼近作柳樽（三十句以內）麻生路郎選

▼各地柳壇（會報）塚崎松郎編

▼文章（評論研究吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

定價

一部　參拾錢

六部　壹圓六拾錢

十二部　參圓（郵稅共）

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます。

▼御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

大正十五年三月廿五日印刷　第三卷第四號

大正十五年四月一日發行　（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　麻生幸一郎

發行所　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　川柳雜誌社

振替口座大阪三一五一四番

大阪市港區八條通二丁目十一番地

川柳雜誌社事務所

振替大阪七五〇五〇番

賣捌書店

（大阪）明文堂　公立社　柳屋　岳文堂　和正堂

（東京）東條　（京都）三宅　（神戸）米田

（金澤）石井　（松任）三須　（岡館）石森

よろこびにそへて白鶴屆けとき
榮轉の今日も白鶴呑み續け
白鶴がいつものバーへ運ばせる

清酒

攝津灘

嘉納合名會社釀

川柳研究叢書第一編

古川柳眞髓

井上劍花坊編

菊半截本綴
定價 金壹圓貳拾錢
郵稅六錢

最新刊

古川柳を社會又は風俗上の研究資料とする特殊な選み方や、類題として漫然選らまれもので無く、明治大正の新興川柳の先覺者が、川柳家としての立場から全人格を動かして選まれたる句、約一千、悉く現代人の主觀に蘇つて來るものゝみである。

こゝに選まれた古川柳は、巨人の血によつて現代に返り咲いて永遠に枯れることなき川柳の花である。選まれたる古川柳こそ、まさしく古典である。

句は万句合・柳樽、柳樽拾遺等から選んだものある。

東京市外杉並町馬橋原五四七

柳樽寺川柳會發行

社主藤堂氏のための惡文！

變人の古本屋である。時々お客さんに氣焰をあげて、あさであんなことを云はればモツト本が賣れたらうにと後悔をするところなど仲々うれしいおぢさんである。なんでも社會に貢献するために本屋をはじめたのだといふてゐるがさうかも知れない。大いに讀んで（大いに買つて）このおぢさんを滿足させて下さい。

＝路　郎　生＝

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

天然果汁の合成に成効せる
唯一の權威を持つ

三ツ矢レモラ

レモラ程自然の味を持つ飲料はありません、天然の果汁天然の鑛泉を以て理想的に出來た最新の飲料です、
英京**ロンドン**に於ける斯界の大家の研究室から生れた**レモラ**是非御試飲下さる樣お勸めします

日本麥酒鑛泉株式會社

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正十五年三月二十五日印刷納本　大正十五年四月一日發行

第三卷　第四號　（第二十七號）

定價金參拾錢

水了軒のお辨當

旅行に…集會に

山をほめ海をたゝへてお辨當

大阪梅田驛前

水了軒

電話（北一八三四〇番　北六四〇番）